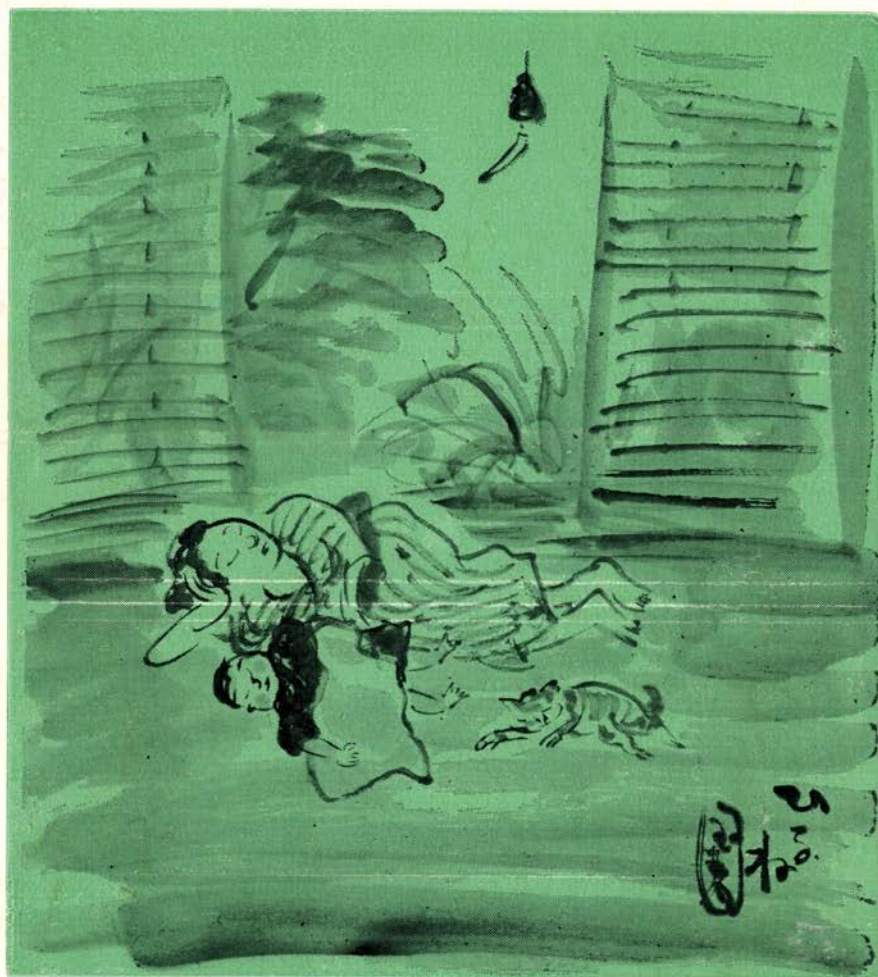


川柳塔

昭和四十五年六月十五日 印刷
昭和四十五年七月一日発行
(毎月一日発行)
(第五十八号)



No.58

七月号

ナマ
《純生》がいつそう
フレッシュになりました



サントリー
《純生》

西尾 栗著

「水鷄笛」

六百円
(送料本社負担)

句集刊行記念句会

日時 8月7日(金)六時

会場 以和貴荘

阿倍野区松崎町二丁目 電話622・1275番

祝 辞 中 島 生々庵
柳 話 若 本 多 久 志
挨 拶 西 尾 栗

「水」	橘 高 薫 風選
「鶏」	大 坂 形 水選
「笛」	正 本 水 客選
「栗」	西 尾 栗 選

席題 三題(題と選者は当日発表)各題三句
会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

〒五四二 大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

発行所 川 柳 塔 社

電話大阪・二七一―三九八五番

負け力士咳二つして噛みしめる

負け越してから白星がつづき出し

勝ち力士颯爽と白鼻緒街に出る

焼きとりの匂いも相撲フアンのうち

大鵬が八百長でなく負けて見せ

中島生々庵

負け力士

機会を得て大相撲夏場所を蔵前の国技館で観た。こうして本場所の客席で見ることは家の茶の間で解説つきのカラーTVとは違つてどの力士も電光の下で美男に見える。いつもTVを見ながら思う事であるが、負け力士が観衆に埋まる中を引きあげる花道はどの位長く感じるかどうか。カメラのスポットも勝ち力士だけに当てて負け力士の後姿を追わないのが多い。こうして花道近い席から見ると、てれくさそうにニヤニヤ引きあげる顔、汗と砂まみれ、中にちらり光るものさえ見せ

る顔、負けは負けだが内容の立派さに惜しみなく贈られる拍手に紅潮した乱れ髪、等々私は強く惹かれるのである。相撲の行司と句会の選者とは、客観と主観、おのずから立場が違うが、裁かれる側にとつても受けとり方に大変な違いがあるのは勿論である。その問題は別にしても血みどろに習練を積んだ結果に對する断とすれば強く反省を求められる点では共通である。ニヤニヤムードで花道を引きあげる等は川柳では許されない筈である。



(恩師の歌碑の前に立つ主幹)

川柳塔七月号

川柳塔七月号目次

負け力士……

川柳塔……(同人作品)……

黒い風船……

川傍柳初篇研究……(八十五)

前田喜代人・岡崎 重義・清 博美・藤井 和雄
川端 柳風・故高須亜三味・丸 十府・岡田 甫

中島生々庵選……(4)

橘高薫風……(2)

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

中島生々庵……(1)

座右の句

一握りあゝ人世は和に如かず

(路 郎)

私の句

苦笑して昨夜の夢を反芻し

市場 没食子

黒い風船

— 路郎忌の幻想 —

橘 高 薫 風

その店へ行くと白いものは何でも揃っているというところがあれば便利だと思ふ。

大根、豆腐、塩、砂糖、メリケン粉、カルピス、ローソク、ピンポン球、エプロン、色紙、白靴、白酒、天瓜粉、東京ネギ、それに綿菓子からホワイトホースまで、白とあれば無いものはないという風な店である。

陳列の品が白一色だから異様なまでに単調で、夏向きの店だと云える。さしずめ店の名を何と付けるか。文字通りの「ホワイト・ストア」、近頃はやりの「バンパク(万白)プラザ」か。また、黒一色の店があっても良からう。

炭、たどん、黒豆、黒胡麻、こうもり傘、モーニングにシルクハット、レコード、いもりの黒焼き、九官鳥、何でもある。黒い霧の

「旅人」以後の麻生路郎作品	東野大八……(22)
へそ曲り柳人録……(大陸巷談)	北川春巢選……(30)
近作柳樽……	若本多久志……(38)
秀句鑑賞……(同人吟)	川村好郎……(39)
九輪抄……	清水白柳選……(40)
思わざりき……	高鷺亜鈍……(19)

川柳五十三次……(一)……富士野鞍馬……(28)

二賞中間発表……(26)

恩師の歌碑の前で……(29)

近詠……(19)

虫明の宿……(43)

川柳は己を磨くもの……(56)

初歩教室……(50)

雅号ぶつちやげばなし……(53)

大萬川柳「天使」……(52)

柳界展望……(54)

本社六月句会……(57)

各地柳壇……(60)

一路集「求人難」……(48)

「スピード」……(49)

「逆」境……(65)

編集後記……(65)

座右の句

人類は悲しからずや左派と右派

私の句

家建ててあの世の母の齢数え

(路郎)

八木 摩天郎

悪徳政治家に汚職官吏、八百長選手といったところも売りもの買いものだが陳列に工夫が要ろう。

それに、黒い風船も売っている。

雲の峰というもありさらばさらばです

—路郎

今年も路郎忌がめぐって来た。雲の峰にすぎないようにして一つの黒い風船がさまよい昇ってゆく幻想。今年も今年の雲の峰が立つ。

先生と東北への旅をした。その東奥日報社主催の川柳大会に、今年は生々庵主幹のお供をして行く。まるで黒い風船二つが、白い雲の峰に向ってさまよい昇るように。

雲の峰と黒い風船の幻想は路郎忌の私の「こころ」だ。一枚の写真のように静止した鮮明な「いのり」だ。

私の幻映はまた無限にひろがり、原爆忌などの悲しみの式典での幾万という黒い風船のマスをも想像する。天上に眠る霊に届かんばかりのそれは、生きている人類そのものに、より以上強烈に、ある種の衝撃を与えるに違いない。



中島生々庵選

大阪市 大坂形水

アルファがあることにして折れておく

物売るに關係のない前口上

失敗のしづりが良うて見込まれる

あまりにもそつなさすぎる不信任

寶石を胸に廢人のくらしする

青森市 工藤甲吉

人生を二軍でいつも球拾い

あすの日へただ眠るのみ枕して

孫病むの報にたちまち酔いがさめ

子を看とる母 火の玉となつてゐる

そのワケで一献このワケで一献

大阪市 山川阿茶

アイラインあれから男よりつかず

人生のハピイエンドへ鯨幕

断絶のニャロメも知らぬ父がおり

万博の文案(一句)

宙釣りの狐へ青い眼ワンダフル

良心のフィルターの穴にひっかかり

岸和田市 内藤きさ子

好感を持てば鼻毛も氣にならず

朝々の犬の散歩の顔なじみ

今日もまたひとこと多き悔に寝る

茶を替えて夫のグチをきいてやり

蝶々は街から来た子の網を抜け

諫早市 川岡靈眼子

生活保護受けて子供ばかり産み

団地族青空天井自家用車

似てるとこ孫に搜して笑い合い

柳友木原春雪停年

停年の朝悠々と春の床

柳友山田鈴江新築

築山に鳥も来て鳴け鯉も跳ね

大阪市 正本水客

波と岩と岩と波と水平線曇る

真珠いかだ 舟の往き来にかかわらず

ヒヨコ陽を駆ける影 しかとあり

ところに白旗 灰皿に遠くいる

その日から鳴かない鳥になつてゐる

出雲市 尼 緑之助

ハプニング歴史をきざみ忙しく

赤軍派ひずみの中を飛び出した

ああ言えばこう言うニュース金になり

役不足リズムの端に乗り遅れ

老いらくの恋にくすぶる煙を立て

島根県 堀江正朗

親ごころ葉書の隅にこぼれそう

手さぐりの欲は小さくあたためる

見えぬから言えぬひとこと佯しくて

うちだけでなかったここでもある話

市場かご見えない僕の好きなもの

岡山県 浜田久米雄

十人は十色こちらも色を替え

還暦のシャツだと赤を恥じらわず

腹八分どころか五分目ほど食えず

てっぺんに酒が上つて来てしゃべり

握手した手が離れないまま座り

高槻市 傍島静馬

ファインプレーしても八百長と見られ

ウィットの中からぬ人で肩がこり

いま俺にいちばん欠けているものに金

土いじりできる定退羨まれ

もうキスぐらいで女房ごまかせず

大阪市 本多柳志

けさ衣畳んで坊主飲む構え

バス初発今日も働く目が出合い

念願の貯金が地価へ追いつかず

会議室へ呼ばれて希望もち直し

耳打ちの通り面会断られ

堺市 吉田圭井堂

ウィークデーなら空いてますよと断られ

一対の櫓で古老範を垂れ

このメロン生きてるうちに呉れたなら
インフレの怖さを知らぬ恐ろしさ

株急落

急激に上げりゃストンと落ちるもの

藤井寺市 西 いわを

慰めに独り言でも云うてみる

倦怠期いっそ入院してみたら

お悔みへ問わず語りの話聞く

いつ迄も生きるつもりの家を建て

おめかしと見えぬ化粧の行届き

豊中市 戸 田 古 方

これで当り前なんや痼疾気にしない

折れてみなはれ起伏がうれしうなりまっせ

ひねくりまわした揚句の果の「面子」か

コンピュータの卦でもあんたは社長さん

進歩と調和コードモ調和をききにくる

大阪市 金 井 文 秋

間接に聞くべんちゃらが心よし

絶対と言いつける自信ゆれてる

あせりより嫌気がさして来た傾斜

金貯めなあかんと病んで身にしみる

暇つぶしとはもったいない時間

大阪市 木 村 水 洞

植木市ほしい植木へ場所がなく

風流とは傘さして赤目の滝めぐり

片言も云えない孫に芸をさせ

口実をこさえて孫の世話をやき

出産と葬儀で長屋いそがしく

大阪市 中 川 滋 雀

赤目の滝

草臥を滝のリズムに合わす足

滝よりも岩場の足に気をとられ

春惜しむ子規の心になって描き

声ひそめ女どうしは機微にふれ

手術日が延びた多弁の目が不安

倉敷市 小 幡 里 風

家中が父に叱られ恙がなし

大人らしうなつて大人の真似をする

掌に憤懣包み拳とす

負けて勝つ構え女の薄化粧

環境がよう似て夜汽車の馬が合い

米子市 八 木 千 代

人妻として遠い虹振り返り

中年へ中年の色似合うて来

好きだとは言えずひとりで酔うている

二仲まで添えて本心書き切れず

珍客にされて土産の気がひける

美禰市

安平寺弘道

消費は美德姑の気に入らず

ミス一つ見つけ監査に張りが出る

良妻賢母で夫も子もつかれ

おはらいもおふだも受けて事故をやり

大阪市

市場没食子

さあ春だ草も娘もウインドも

古稀近く無欠勤な哀れなり

雑魚はごこりの言い分申上げ

水温む候なり風呂も早よう沸き

姫路市

村上春巳

赤ちゃんを育てる乳で無い形

元気かと問えば毎晩飲んでます

ポンポンと切った啖呵で都落ち

鑑真像閉じた眼に弥陀浄土

神戸市

仲どんたく

娘が嫁って風吹き抜ける家の中

分譲地蓮華は最後の色を染め

老二人歩幅が揃う朝の山

I 君結婚

風薫る新妻薫る花薫る

京都府

都倉求芽

冷めたさが意外な水へ手が慌て

粘ばっこい雲が垂れてるネオン街

新緑のしたたり東山が濡れ

目覚しの馬鹿正直に小突かれる

石川県

馬場魚山

組んだ足振るくせ待合室の客

子に宛てた手紙返って来た不安

先生が一筆入れて菊が生き

投げだした義足いたわる言葉なし

兵庫県

河原みのる

長崎にて

おあつらえ雨の長崎だが困り

天草にて

十字架も花にうずもる島の春

熊本城にて

籠城のツルベ手繰った深さみる

別府にて

お猿サンに逢う予備智識授けられ

富田林市

浅川八郎

婦長さん理性に強くあらせられ
良い事がありそう頻りにパフ叩く
御三時はのびたうどんで賄われ
透視するような妻の瞳に慌て

大阪市 児島与呂志

母上の洗い物妻うれしく持ち帰り
母上の気嫌が良かったなとわかり
脱き更える朝氣に成らぬ春の肌
誤解とけ笑顔に嘘の無いふたり

松江市 中川晃男

名犬に朝の散歩を引きずられ
話すとも歩くともなく老夫婦
苦労したこの道やはり子が歩み
制服の中で青春ちぢこまり

笠岡市 木山要次

持ち駒に誤算があつてうろたえる
気が付けば俺はやっぱり左きき
おもしろい齡だ叱ればまた笑う
もう五分眠むらしてやれも春の朝

大阪市 今西章雅

香典がいくつも重なる暗い月
張り終えた果の真ン中で蜘蛛ダンス

委員長だんまり葬儀屋挨拶し
だまされた方が悪いとお人好し

富田林市 岩田美代

正義の味方必らず出るから漫画好き
ピンからキリ キリのマダムにいる私
おばはんにちがいないけど腹が立ち
あらかじめ用意のせりふど忘れし

大阪市 天正千梢

新旧とりまぜ茶の間にぎにぎし
お手本にしてた人から愚痴を聞き
スケールの違いタイミング合わず
こぼれる湯へ女満ち足りる

門真市 福島鉄児

すねてみる仕草も年が入ってる
他所様のベースアップを妻が云う
酔ざめが我家であつて慈なし
仏さんも造花で辛抱してもらい

和歌山市 野村太茂津

久し振り妻の手をとる初夏の山
錆びついた心へブレーキの軌む音
逃げ道をこしらえケンカふっかける
玉砂利を踏めば軍靴の音になる

米子市 林 瑞 枝

胸張つて歩こう鏡に教えられ
合槌のうっかり打てぬ愚痴なるか
いい女になろうと思ふ四十坂
夫酔うてすねた寝息へしのび足

竹原市 小 島 蘭 幸

雑沓の横顔ばかり大都会
点けたり消したりひとりで見るテレビ
嘘だとは知っていました好きでした
風は意地悪ひとりを意識させて去り

竹原市 森 井 菁 居

この小さき蟻のいずこに土性骨
菜をかじる虫には虫と言う立場
反省をさす雨だれの音つづく
灰皿の底に妥協の余地が見え

下関市 石 川 侃 流 洞

停年から消耗品に似てつかれ
機関士の緊張あご紐かけて乗る
マイホームやっぱり養子だなと噂
オフイスの牛乳瓶へ春を活け

広島県 岩 谷 二 三 枝

土蛙青田が嬉しいジャンプです

君を呼ぶ愛の裾がかえり来ず
緑の山縫う鈍行の旅もよし
うそぶけど所詮はずせぬ鎖です

倉敷市 小 野 克 枝

君が代をチャンと唄った得意顔
明るさを沢山抱いてゆく見舞
迷信を鎮静剤として使い
云いたいだけ云えない妻は子の味方

岡山県 直 原 七 面 山

庇い合つてる出戻り同士
墓標の人と言葉のやりとり
女の杖で僕はポン引き
雪に匂いを見付けた詩人

倉敷市 水 粉 千 翁

ごもつともさまで承知をせぬ無口
きびしさを乱してならぬ鞭が泣き
任されてもううて動かされました
崩れてはならない意地のほつれ髪

高槻市 福 田 丁 路

孫の云う通り遊んで草疲れる
忠孝の額が立派な佗住居
衣食住足って録でもない遊び

大和岡寺にて

風薫る明日香の里のほととぎす

竹原市 山内静水

母の日を若返らせる夫婦箸

定退へ悔い残すまじ残すまじ

飲む真似をする盃の芸達者

物音へ妻のいびきがびたり止み

西宮市 若林草右

金婚式を迎う(二句)

感慨は金婚式を句にさせず

孫ひ孫金婚さんは名を忘れ

欠伸するその隙もない満員車

ベテランの掏摸も手の出ぬ満員車

出雲市 弘津柳慶

物価高へ年金いささかあわてさせ

桜から日本は春の姿なり

ご機嫌が悪く斜に印を押し

長男は無心次男はコツコツ貯めている

新居浜市 安藤桂仙

背伸びするように春菊花をつけ

一飯の義理へ尻尾を振って去に

家中をもませて伯父は酔うて去に

男性がスカートはく日も遠からず

岡山市 田村藤波

古米のように老人扱われ

姉を見に来て妹に惚れて去に

開発の美名に自然泣かされる

み仏は白を尼僧は赤の花を好き

鳥取県 清水一保

菜の花も蝶も科学の世に疲れ

命有る限りと花にいたわれ

悠々と未来へ跳ねる鯉のぼり

じいちゃんの万博土産に湧く茶の間

大阪府 室谷鉄舟

八十の歩巾に合わず通り抜け

春の陽よ皆美しい息づかい

春雨に裸像あやしい香を放つ

因縁を成程と聞き恐くなり

奈良県 石倉旅風

淡淡として環境を奈良に変え

灯籠の位置変えて今日終る

鳴き声は聞くに任して告天子(三月二十九日)

好きな趣味なれば笑って事が済み

兵庫県 遠山可住

団体の写真自分を先ずさがしくさしてた父にだんだん似て来出し
自慢話するとき日時まで忘れない
高校の子に笑われている炬燵

守口市 羽原静歩

重心の傾くままの齢となる
生きる日の糧よ鏡の曇り拭く
地に残すその足跡が消えかかり
気がつけば父の面影踏んでいた

大阪市 福井野迷路

動物園(二句)

末孫と相談一決動物園
なたね梅雨ゴリラも天を仰ぎ見る
公害へ地球管理も遠からず
人が観る自分と俺が観る自分

兵庫県 大江秋月

停退で帰る故郷に山が待ち
盆栽が増えて停年期が近い
来年を咲く盆栽に水をやり

長男大学へ

金が無くなれば大学から帰り

岡山県 出原敬一

別人の声で小銭を借りに来る
故郷へ錦どころか張込まれ
痴話けんか明ければ窓から見送られ
石仏のこみちをあちらは老夫婦

大阪市 神谷凡九郎

大惨事やつと法案腰をあげ
基本的人権世間を混ぜかえす
音痴節の方がやっぱり花見酒
花のふる下に麻雀台がある

広島県 高橋鬼焼

へそくりの額家計簿につけてなし
手の汗をふいて握手の順をまち
ふところがさびしくなって旅つかれ
寝すごしただけがせわしい朝となり

東大阪市 久米奈良子

花がたみ日記に見えし春の恋
その底に一粒真珠触れさせず
寝返えりは恋の重さを繰り返えず
文化財はだか電球の下を織る

八尾市 高杉鬼遊

そのけと人間様へクラクション
チューリップ造花のようにしゃんと咲き

五十年生きて残りを余禄とす
ハンガーへ掛ければ背広しゃんとする

出雲市 王 紫

くり返す真理は常に小数派
先頭の蟻後列を疑わず
俗臭を蔽い隠せず袈裟衣
追憶を胸に女の確と生き

倉敷市 野田素身郎

飲み過ぎた悔いに今朝は五月晴れ
ご意見のとおりにすれば社は潰れ
大事な日なのに剃刀鈍って
メダカの死がそんなに悲しいのかK子

芦屋市 丸 川 初 甫

妻の任務ポケットも点検し
気の早い市場魚をもう包み
帯つけの姿三面鏡も春

中村鷹治郎

院賞に輝く素顔の鷹治郎

倉吉市 奥 谷 弘 朗

夢と言う字ばかり書いて小役人
若僧となめた油断へ打込まれ
大志いま途方にくれている噂

平凡がいいな風呂の湯があふれ

岡山市 川 端 柳 子

爪染めて島に保母ありみかん熟れ
人形にいい子でいてねと旅に出る
鉄かざす蟹のあわれは横に這う
ふとそんなことを思わす窓の月

八尾市 香 川 酔 々

主義は主義だから働く甲斐ができ
スト解除どれどれ靴を磨こうか
アルバイトあっさり休む忙しさ
湖に向って蝶の身ごしらえ

伊丹市 小 川 静 観 堂

雨にぬれても新茶たのしく掌を洗う
虻も蝶も床の間までは寄りつかず
花びらをかぶって悠々池の鯉
天気予報たしかめもせず幟あげ

大阪市 酒 田 清 子

母の日の孝行素直に受けました
ボスと言われたくないので閉じこもる
おどけるのも居て病室の一とき
孫が来てシャツ汚して引き揚げる

姫路市 隠 岐 不 醉

駅伝のように新婚プラン組み
万博と言うに病院みなつまり
すみませんすみません言うてことすまし
選挙戦下目高目と票をよみ

堺市 高橋 千万子

切り札をくどくどと女なり
腹巻に入れた秘密がくたぶれる
安らいも出来ず女医さんもう四十
万博で大阪を見た日本人

大阪市 宮尾 あいき

葉桜にせきたてられて花終る
そよ風が花の終りを派手にする
墓の草引くに忍びぬやわらかさ
鉢の木へ日の当る場所借りてやる

東大阪市 竹 中 肖 二

それなりの風格を持つ猿のボス
高給は欲しいし自信のない仕事
サンマに未練残して猫は追いやられ
日雇の仕事つぶしている時間

東大阪市 竹 中 綾 女

カーテンを洗えば使えぬよう縮み
泣く児負う母へ同情する車中

楓道若葉をすける陽のぬくし
石楠花の蕾の濃さの乙女めき

今治市 越 智 一 水

赤旗よなびけ五月の風みどり
五月だから草 草らしく匂い
山に来て僕の若さをたしかめる
ひくいめにことばかければ折れてくる

平田市 久家代仕男

参道のみどりに白衣ひきしまり
貧に馴れはは土くさく老い給う
原案を骨抜きにして酒が出る
丹田に怒り納めている寡黙

出雲市 原 独 仙

BGに欠伸もうた五月の陽
春雨へ濡れて行こうが走り出し
花の下課長職場の顔でなし
おばあちゃん老舗守った座りだこ

札幌市 平 野 青 夜

青春の蹉跎は整形医に発し
如是我聞女人一切度し難し
弥次馬となつて気楽な口を利き
思ひ出は唯うつくしや鏡見る

鳥取県 谷 無 閑

裏切ったなんてままごとのような恋

生活のどん底人相迄かわり

長寿法俺には出来ぬ事ばかり

岡山県 荻野 鮫虎狼

退職のときに初めてほめてくれ

刈られるも知らず雑草花を着け

神様に頼め裏口にも頼め

岡山県 坂井 三 葉

春の草萌え地蔵も蘇えり

日曜のプラン末っ子にくずされる

白壁が因習深く秘めてくち

大阪府 有信 新之助

一本の鼻毛にわれを忘れたり

この俺が社会的中堅層

英断をもって空箱全部捨て

桜井市 岩本 雀踊子

残り火のような恋の灯が消せず

肩の荷をおろして夫婦だけの旅

手のぬくみ残して去りし友思う

松江市 吉岡 通児

わが性の悲し名も欲し実もほし

桜花一しゅん炬燵と蚊帳が入れ替り

物干しで知れるこの家の頭数

島根県 小砂 白汀

セキレイの尻尾どうにも止められず

禿山を洗った色で春の川

救いなき涙のごとくさくら散る

熊本県 有働 芳仙

停年へ淋しい虚勢欠げ茶碗

面接へミニ美しい脚を見せ

肩書へ飲む日がつづく花名刺

和歌山県 土谷 城石

ぼち袋孫に一日もてただけ

風向が変って妻を連れて出る

良心を押え誤魔化す電話なり

京都市 松川 杜的

深草宝塔寺吟行(三句)

砂踏めば源氏の君の声がして

朱と緑視野一ばいに春の風

堺市 伏見 茂美

寝るまだけ外す眼鏡よ拭いてやり

絵馬少し動かし春の風匂う

笠岡市 木山遠二

真相がわからず噂おもしろし

六十とも八十とも見え古稀の皺

猫マリの跡目を犬のチロが継ぎ

松江市 小林孤呂二

切れ味のよさを人事課見ていたり

休耕地なにを蒔こうか植えようか

生れきて男主役の枷を負い

愛媛県 村上旭童

ない袖を振らせに二三人でくる

またしても妻にやられたあほらしさ

拝み屋に命あずけてうごかない

岡山県 横山一声

恋をして居るのかこの頃美しい

せめて谷川だけは魚住ませたい

どうせ金たまらないから贅沢し

呉市 林野甦光

補聴器が音を掴んでいる真夜

素晴らしい嘘こけしが微笑する

ちぐはぐな夜明け酒場の灯が残り

下関市 桜川不水

生きてゆくよろこびがあり豆を蒔く

囃子でも入れたい子子の宙返り

雨のち晴二つの心譲り合い

堺市 新谷笑痴

ダイヤルの指へ思案がからみつき

顔色を読む兎になつて陰が出来

戦火またメコンの流れを遡のぼる

笠岡市 出原真奇

県下川柳塔同人懇談会に出席す

自己紹介ちよっぴりのろけもまぜて置き

二、三日長居をすれば噂され

附添の疲れを浜に出て背伸び

大阪市 河井庸佑

どっちでもよいのに反対意見出す

団交ヘストは避けたい線は伏せ

お互に待たせるつもりでおくれて来

松江市 柳楽鶴丸

一線のない生と死の境

吊り橋のようにゆれる恋の橋

子供の作文を読んで

金魚さん寒かったらうネと幼稚園

愛媛県 渡辺曉童

油虫家内五人が皆あわて

もう貯金すすめに来てはくれません

日に四へんたべる百姓見習中

高槻市

山田季賛

誤魔化しの効かぬ監督もて余し

我が身かわいから少しだけ云っておく

コンクリートの割れ目に春の草が伸び

倉敷市

藤井春日

求人難雑魚一匹も逃がさない

野心ある男と知らず社を委し

花嫁も馴れぬ手つきで酌ぎ廻り

岸和田市

葛城伊三郎

へんてつも無い二人だが馬が合い

会計がケチで団体袖にされ

保障金取った田畠に草が生え

久留米市

永松道雄

万博へ喜寿の門出が危ぶまれ

久し振り訪えば老母の涙声

風鈴の音色が夏の汗にしみ

和歌山市

垂井葵水

良心の日記余白のまま閉じる

オルゴール止り受話機が咳いて来る

鯉轍りの反抗主婦の手に余まる

大阪市 西川誓二

スモッグにあきれて泳ぐ鯉のぼり

加速度に来るところまで来た二人

満員と云うて断る手を使い

大阪市

島野大吉

見透しの利かぬ眼鏡を妻が拭き

石段が慈悲とはきつい観世音

銭のない時は財布にケチを付け

堺市

藤井一二三

五月七日妹交通事故に遇う(二句)

せい一ぱい生きる姿の脈をとり

税込みの方で話をするひけめ

きっちり薬飲む子で先が案じられ

岡山県

池田古心

もの言わぬ日のむかずきが胃にさわり

ホットした隙を悪魔の目が覗き

アヒルでも無いのにザーマス尻を振り

大阪市

宮地双楽

行きたいがまあ止めとこと日曜日

食うて寝るだけの余生をもてあます

気まぐれの仕草相手のかんにふれ

鹿児島市

土岐トク子

歳月が人生航路迂回させ

惜別の集い大楠公の花の下

商魂は夫のかげに飽き足らず

大阪市 福井多蘭子

赤旗と白衣ストの門に立ち

老生就職す連休をねてくらし

ビル隅土を見つけてはこべ草

倉敷市 竹内翁童

きず口をえぐりあってから親友

歩が金になるからギャンブルを追いつけ

気だけが若い年寄りと馬鹿にされ

松江市 岡崎祥月

月が友ふくろうが友 夜の巡視

苦労かけたなと妻に一寸詫び

岡山県 大森娛句楽

方言の返しに困る顔見詰め

和服姿と五重の塔に古都香り

奈良県 西辻竹青

男前だけでは嫁も来てくれず

弱点をつくなくと明るく酔うている

加賀市 細呂木魯木

すんなりと合格出来た解脱感

お祭りへ女の子がほしい妻のぐち

八尾市 古川鶴声

松山川柳大会にて

柳友の情けで心の人に会え

人柄が知れる文章の便り来る

竹原市 時広一路

四十の傾斜へブレーキきしむ音

僕一人居なくても同じ満員車

大阪市 本庄金三

アナウンサーへ人怖じをして引きさがり

ビル工事頭上注意の落し物

小松市 四方天弘実

包み銭出され強気がひるみそう

ご先祖の土地だ年寄耳かさず

和歌山市 増田次章

席ゆずる吾れに集まる眼を感じ

良心じゃない憶病なだけです

自選

島根県 藤井明朗

百花しおれて仇花となるネオン

なにかが起る 生きている都会の夜

万博がえりは疲れましたから話し

町内に七面鳥のようなひともし

名古屋市 吉田水車

もの言わぬ生きものの眼の美しき

鳥共も飛び立つまでの親心
此頃は臚ネオンと申そうか

緑雨氏追悼

名吟と共に残せよ西之町

高槻市

若柳潮花

身をまもる女の嘘を聞き馴れる

ゼラシーへ燃える若さがまだ残り

居つつけへ味方するよに降りつつき

割り込んで掛ける頭をひとつさげ

鳥取県

森田布堂

病棟に今日も死があり生があり

陽が落ちて砂にまだある昼の暖

靴磨きもうこの辻に見あたらず

病床で卒業を知る母の笑み

大阪市

不二田一三夫

親指の貫録 こぶしの中にいる

降ってきたがー今夜は書けそう原稿紙

寄席(二句)

都落ちしてからコンビとも別れ

浮き沈み 沈みっぱなしで芸も落ち

★

川村好郎

借る方は一万円と軽く云う

あんたかてくどうまっせと妻

告別式喪主に代ってまだ値切り
新緑へ観光バスが速すぎる

虫明にて

道の真中悠々歩くも久し振り

西尾 榮

シャベルカー董の花をすくいあげ

一ト言多いのも司会者

よう言うてなはるわと相手にしてくれず

はがらかとも言われ出しゃばりとも言われ

同じ歳の計に妻の助言過多

北川春巢

雨宿り脚不自由な人多し

見合写真来ても来んでも淋しがり

十万のデモ整然と威を示し

その頃の百円やでと念を押し

私鉄ストカメラがついて撮り廻り

若本多久志

管長の色紙和の字が和に見える

行きとうもない二次会も宮仕え

祇園にて(三句)

孫に似た菊千代さんが酌いでくれ

白川のせせらぎへ古稀の郷愁

コンピューターの事も知ってる舞妓にて

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

分別がついて化粧濃く寡婦構え
開宴へ下戸はさつさと折包み
ほろ酔をそぞろ歩いて無駄にせず

大洲市 米 沢 暁 明

好き同士行くところがある会終る
週刊誌ここは個室でよむところ
本心は何を隠そう金の額

今治市 月 原 宵 明

十円を恵んで小さい善に足る
八百長と知らず合羽で観戦し
青空へ角出してみる蝸牛

和歌山市 秋 月 宏 方

飯場の灯代筆してる中学出
時代相離婚歴などいうことば
胃カメラで胃のごきげんを見て貰い

思 わ ざ り き

高 鷲 亜 鈍

思わざりき愛人の手に縛ろうなどと
著者は命掛けなのに趣味の出版引延ばし

ものならぬ親父ならこそ解りよい
うっとしいだらうな肉親さえ寄りつかず
先生がさんくん奴に下落する
お歳暮も出すばかりの素寒貧
やけくそな柏手も音ばかり
なにもかも不足や愚痴を生甲斐とす
絶対の神は絶命しても無有
自らも他人も助かれば平和

信心はしてもわからないことだらけ
ああ恋人はいっそ遠いところよし
独酌はよいかな一人合点できるので
本妻から離婚の申し出があった
六十年過去も未来もハッピーニング
髪生やしても代読してもらい
剃れや落せの髭に迫る女奴
まん中の途切れた髭のなつつこさ

名古屋市 長谷川 鮮 山

三分として前置きもする電話
二、三日ここが峠の三分咲き
販売機急ぎなさんなと無表情

岐阜市 市 川 鱗 魚

花まつり釈迦も甘茶の腹具合い
夜の蝶ネオンは嘘が言い易し
かかる世に旗の折り目も母があり

今治市 長 野 文 庫

ご自由になさいと白紙委任状
草茫茫一億円の空閑地
言葉尻とらえて易者易を立て

小松市 山 上 千 太 郎

谷川のこれがほんとの水の色
男ざかりたえず何かが燃えつつけ
あごをしやくればついてくる飲み仲間

川傍柳 初篇研究

(八十五)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義 ^故高須啞三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田 甫

626 どふれいと川の向ふへいに出る

卍 弓

高須 〓 不明。川の此方で声をかけたので「どれ」と川の向うで応じたことになるがあまり大きな川ではないらしい。どうゆう場面か考え及ばぬ。
岡崎 〓 不詳。水の流れる川ではあるまい。
清 〓 詠史句あるいは故事を詠んだ句ではないか。

川端 〓 深川の岡場所ではないかと思う。俗に辰巳と称せられ遊里が数カ所にあり

玄関から舟を呼んでと川へいひ 七・18
類句かどうかもわからないが。

丸 〓 中川の船番所の句と解している。明六ツから暮六ツの間、上総下総の往来船を改めた所で開設当初は相当に嚴重なものであったが、世が泰平になると共に検閲は形式的となり、明和頃には船から「通ります」

というところ「通れ」といって通行を許した。

中川は同じ挨拶して通し 初13

但し本句「どふれい」で「通れ」ではないので、確定しかねる。

岡田 〓 丸先生の解の通り中川の船番所。「どふれい」は武家屋敷の玄関番のコトバだが、船番所はいかめしいから、しやれてこう詠んだもの。

627 警女の文ばっちらがって読で遣り

卍 弓

高須 〓 「ゴゼの文」は「ゴゼへ来た手紙」

で、人物はどんな人物であろうか? 「ばっちらがって」がよくわからぬが、「面白

がって」か「取りあつて」ぐらいの意と思う。既出に「ゴゼの色口跡のよい男なり」

(25) というのがあつたが、

ゴゼの供何話をすかにこつかせ 四・6

ゴゼの供知つたのが来りや舌を出し

などからこの句の情景はわかる気がする。

前田 〓 「ばっちらがふ」は、うばい合うの意 外へはやらじとばっちらがふ徳利 玉・22

丸・岡田 〓 前田説贊。

628 犬坊へ舌を出しくくやみ也 泉河

高須 〓 犬坊は犬坊丸で、曾我兄弟の父伊東祐泰を討つた工藤祐経の子。句意は曾我兄弟に仇討ちされた祐経の「くくやみ」を、その子犬坊丸に言っているのだが、小気味よく思っているの、舌を出すような気持ちで「くくやみ」を言っている——犬と舌を出すをかけた狂句臭はあるが、類句にもそういう傾向が多い。

鼻にしわよせて犬坊いきどおり 一二・13

犬坊はかみつくようにくやしがり 一四・4

犬坊へへしに梶原けしかける 一九・25

岡崎 〓 賛。建久四年、曾我兄弟が父の仇工

藤祐経を討ち取ったとき、兄十郎祐成は討死し、第五郎時致は生捕られたが、このとき、祐経の子犬坊丸は固く縛り上げられた五郎の顔を扇を以て打った、また五郎を斬ろうとしたが、かえって大声で叱られ、恐れて斬り得なかったとも云う。頼朝はこれを知りて、その武士にあるまじき態度を怒って、犬坊丸を信濃国伊奈に配流したと新著聞集にある。

丸・岡田〓賛。

629 車がりかけ出すと家老留メ

門柳

高須〓車がかりとは、軍法で先陣、二陣、三陣と順ぐりに休みなく敵陣に攻めかかる法で、川中島の合戦で上杉謙信が用いた軍法といわれている。句は播州姫路の城主、榊原式部大輔政岑が、吉原三浦屋の遊女、高尾（六代目といわれる）に熱くなり、白昼堂々と行列をととのえて吉原へくりこんだのを家老が警告している情景だが、結局は高尾を請け出し、下谷池の端に囲ったのが幕府に知れ、政岑は隠居仰せつけられ、その子政求は越後の高田へ転封の憂目を見るに至ったが、それは後の談。

大門へ榊の入るにきやかさ

一九・5

榊の威松も根こそぎ引きぬかれ

前田〓殿様の行列（吉原行）に加わりたが

る家臣達をとめる家老で、前説の殿様に諫言しているのとすこしちがう。（高須さんは家臣達の意にとられていたかも知れませんが、はつきりしていません）「車がかり」は、ここでは次々と行列に参加してゆく状態をいっているが、目的が遊里だけに要を得ている言葉である。

岡崎〓榊原家の家老が、殿様の派手な吉原遊びにいきり立っているのを止めているというだけでよからう。「車がかり」は榊原侯の家紋が源氏車だったのを利かせているわけである。

清〓岡崎氏説賛。家紋をきかせた句に、

通ひ車とうきな立つ御放埒 一〇三・9

というのもある。

藤井〓車がかりは高須説のように軍法で、堂々と正面からうって出るとく白昼行列をとのえて、世間態をはばかりずの御遊興を一家の大事と留めた家老の苦衷で・岡崎説の如く源氏車を利かしたことは勿論である。

高尾より器量すぐれた留守居なり

車より留守居の舌はよくまわり

家老職紅葉を抜いて車留

などはいずれも家老のお家大事と車をはこんだが、やはり高田へ転封されてしまった丸〓岡崎氏説賛。「車がかり」にそうこ

わる必要はない。

岡田〓「車がかり」は次から次へと、新手の軍勢を替えて攻める軍法だが、吉原行をさして「車がかりにかけ出す」とはどうもシツクリしない。義士討入りを聞いて上杉

八木摩太郎著

古川柳に詠まれた堺の人々

送料共 七五円

家の者どもが、義士を討とうとした場合などが適當だ。

前田〓「車がかり」の「に」は写実性をもっているのに、紋説やくだわらない説など納得できない。

岡田〓「車がかり」は上杉流の戦法だからこれで吉良家の縁戚、上杉家を暗示した句と断定していいと思う。

630 金屏風立テにやうられぬ希也

泉河

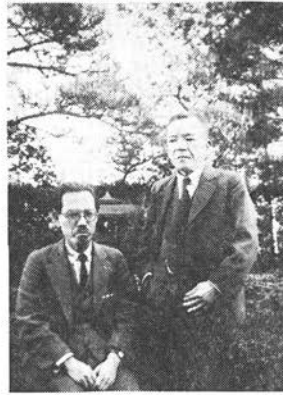
高須〓既出「すばしりの魚どん棧敷への馳走」で説明された山王祭の句。金屏風は、

その祭のために棧敷へ立てたもの。すばし

りは六月十五日より漁獲されたので、この

句が成り立つたわけ。

丸〓岡田〓賛。



路郎先生（左）と長崎柳秀氏
—昭和10年2月23日—

昭和二十八年八月号（川柳雑誌）

停年退職昼も浴衣の人となり

出鱈目に生きて米寿もないものだ

よく怒るようになったにフト気づき

人前はあんな女と云つておき

四十では女もあとへひかぬなり

老夫婦一ン日何も云わず暮れ

「旅人」以後の

麻生路郎作品

— 1 —

よう降りまんなあと老妻にねぎらわれ

名ばかりの夫婦と知らぬ公益社

二十八年九月号

海のきわに生れ 鯛より知らぬなり

二十八年十月号

銀行と縁もないのに忙しく

貯金帳忘れたところに出し入れす

一万円今からツリが案じられ

いつのほどにか二号に養われ

女のいない酒はさみしき

君知るや六十路をすぎてからの恋

二十八年十一月号

金のことかと同僚うけつけず

同僚だしかしあいつは金があり

二十八年十二月号

足らぬなら足らぬでもよし十二月

女の訪問を特によるこぶ父でした

灰色だつたり白色だつたりする銀座

べんちやらのつもり 放送聞きました

老妓とはさびしき名なり 秋の夜の

社長室の外は畳に椅子を置き

いける口一時が鳴つたなと思い

酔うたのと幹事は折を二つ提げ

悪筆をおしいただいたお女将なり

二十九年一月号

ストをした顔もしないで年賀に来

数の子で暮から女侍べらせる

幸福は春草々を旅仕度

呑みに行く伊勢とも言えず初詣

(清水白柳)

へそ曲り柳人録

東野大八

「大陸巷談愛読、菊五郎が奉天へきて、ヤマトホテルのカウンターで署名を求められた。彼は宿へ泊るのにサインをさされた経験はなかったらしい、プイとふくれてホービルホテルへ行ってしまった。しかし、しんばが出来なくて、またヤマトホテルへ泊ることになった。」

時の奉天演芸協会の支所長は、安井八翠坊、おかげで塊人は平安劇場の一番よい席二十ほど独占した。」

堀口塊人さんには申訳ないが、この人の一年前のハガキが現れたので、ここから発想して、少々へそ曲りの柳人記を書く気になった。

広島島の福井天弓さんからお掘わけの、むかしの奉天の写真に、奉天川柳大会の記念撮影がある。八翠坊さんや、大島満明、石原青竜刀、宇和川木匠の、当時そうそうたる皆さんが前列にキラ星の如く並んでみえる。二十歳の若い私は最後列の端っこである。

菊五郎が来満したとき、私は二枚の招待券を懐ろに持っていたが、井口呑湖（奉天職安所長）の子分で事務員の鶴崎一芥がそれに眼をつけ、金に替えてパイ飲もうと持ちかけた。芝居より酒と女の方がいいぜ、と金ブチ眼鏡を光らせ私を口説いたためである。

千日中店の行きつけのおでん屋の女将に、その二枚を五円だったかで売りつけ、コップ酒をあふり、十間房に直行したものだ。一芥は、私の三つ位い上で、キザっぱい二枚目タイプだが、彼の情婦というのが十間房の鮮媚なのである。月給日のたびに三日居つづけて、あとは私のアパートへきて、何やかやとめしや酒をたかるのを常とした。私のふだん着を着込んで、私の持ちものをよく質屋に運びこむ。私のアパートは、奉天は春日町の盛り場のどまん中で、四階の六畳一間である。窓下に千日中店の花やぐ灯がみえ、眼の下の通りには、いつもやき鳥屋の屋台が二、三軒、赤ちようちんをぶら下げていた。

懐中無一文のときは、こんな風景が眼に毒で、一芥はよく窓から首をつき出し、下にたむろするやき鳥屋の客をからかい、バカヤロウ、口惜しけりや上ってこい、とツバを吐いたりする。短気なのがアタマへきて、ヤロウ、待ってろ、と上に向かってリキむなり、アパートの入口あたりにかけこむのがみえたが、ただの一度も、私の部屋を捜しあてた奴はいない。たった一組の私の敷ぶとんとかけぶとんを、二人で一枚ずつかついで質屋に行つたこともあった。質屋は、同じビルの一階の一つにあつたので事は便利であつた。たらふくチューをあふり、結局押入れの中で二人抱き合つて眠ったが、夜具代りは古新聞である。もしやもしやにした新聞が、これほど暖かいものだと思つたのは、彼の賜ものである。

奉天日日新聞編集長の石川緑泥は、古川柳研究の大家を自称していた。頭をいつも角刈りにし、年中豆しほりのハチ巻をしている四

十男。いつも足下に一升びんを置いていて、冷やでぐびりぐびりと湯のみでやり、夕刊のコラムにエッチなことがかりかく。私は、懐中無一文になると、彼のデスクに現れ、下手なコラムを必要以上にもち上げる。すると必ず愛用のせし湯のみパイに酒をついで、私に「飲みねエ、飲みねエ」というのが常だ。川柳大会があるたびに、私はこの社へ祝儀か賞品を出してくれとねだりにいくのだが、彼は自称川柳人のくせに、社には通さず、いつも一円しかくれない。一円だと四平街の安酒がコップで四ハイ飲めて、湯豆腐がつく。一円ばち、大会に出しても仕方がないのでいつも着服していたわけだが、この罪はつねにハタ一枚（当時の一円は満洲国の五色旗がついていた）だからである。そこであるとき酔った挙句、狂歌で申訳ないが

―ハタ一つ鼻高々とロクでなし

というのを大書して、彼のデスクにのせ、足下の酒四合ほどを無断失敬して引揚げた。ところがそれから数日して、奉ビルで岸田国土の歓迎座談会が催された。私は自称文学青年なので、先生のすぐ前で、せつと口述をメモしていたのだが、いきなり横合いからニユッと汚い手がでて、メモ帳をわしづかみにするなり私にたたきつけた奴がいる。カッとして思わず立ち上ると、小さい角刈が眼の下にいた。それが私を見上げてどなった。

「コラッ、大八。この酒泥棒め……」

小男の声は総じてでかい。私の眼の端で、

前にいた天下の大作家岸田国土が、バネ仕掛の人形のようにとび上るのがみえた。

当時、奉天日と張り合っていたのが奉天毎日である。ここは川柳欄は大張り込みで、毎週一回、紙面の四分の一ほどの特集をやった。あるとき、井口呑湖選で私の句が特選になった。この一句は賞金三円の図書券が出た。相交らずの文なしの私は、新聞に出た瞬間、ノコノコと奉毎へそれを貰いにいった。出てきたのが、栄養失調のベートベンが、針金の眼鼻をかけたような汚ないフケだらけの男。名刺をみたら文芸部長日下部某。私はいった。図書券でなくキャッシュで貰いたい。それが不可能なら酒屋のキップに肩がわりして頂きたい。彼は黙って、くしゃくしゃの巾着から三円をつかみ出していった。

「おのぞみ通りゼニを出そう、しかし、一人で飲んでもつまりますまい」

千日中店の「どどん」という店へ、かけこんで行った。この店は初めてだが、ここは入口に大きなたいこがあつて、客が現われるとでぶの女将が、どどんとそいつをひっぱる。カンタン相照らして、日下部は川柳をやるといひ出し、私に兄師するといひた。かくてその柳号を求めたので、私は「日下部どどん」とせよ、といった。やがて私に、汚いベイトベンの弟子が生れたわけだが、つき合ってみて愕いた。彼は途方もない大金をつかんだと思うと一瞬に散じる大癖がある。調べるとこうだ。洋服を買い、電蓄を買い、扇風機をかうのだが、それが一物も彼の下宿

には見当らない。それもそのはず、彼は当時大流行の月賦販売に眼をつけ、それをタライ回しにしている、カスリでつないでいたのである。日下部どどんは、私と密着していくことによって、新たな月賦購入の名義人たらしめようとしたからである。いかん私も、この不敵さにヘキエキして逃げ出した。今思えば酔余の柳号、どどんにも泰然としてうけてたつたその根拠が思われて、懐しい苦笑がわく。

奉天省公署の科長で、中山というのがいた。彼は仁丹の如き壮大な口ヒゲを蓄え、役所でも「長官」のニックネームで名物であった。年四十過ぎ。あるとき春日町の千里に連れていかれ、大いにメートルをあげていこうと、彼は末摘花を片っ端からとうとうと口にする。私は感嘆して、近世川柳の功德を述べ、「川柳大陸」に加入してどうか、と誘った。快話したがあとが悪い。千代田通りで火事があり、彼の住居のあるところと承知していたので、川柳勧誘の序の口でもありと飛んでいったら、彼は丸焼けのわが家を隣家の窓から眺めやうと、昂然としていった。

「何はなかつとも、これだけが焼け残った」

みると真新しい日本製の柳行李である。一体、何が入っているのだ、ときくと、彼は徐ろに自慢のヒゲを一ひねりしてフタをとった。中は薄っぺらな小冊子の山である。何気なく一冊を手にとるなり、私はアッといった。なんと、その柳行李にぎっしり詰ったそれらの刊行物は、コレすべてワイ本であった

路郎賞

川柳塔賞

候補作品中間発表

自 四五年二月号
至 四五年五月号

菊沢小松園氏の健康上の都合で二回目の中間発表は休ませていただきます。したがって今回は路郎賞の選考委員が五氏、川柳塔賞は前回どおり三氏となりました。

十月号には最終の候補作品と二賞決定が同時になります。

(中間発表の句数は各選考委員とも限定されております。)

路郎賞候補作品

北川 春巢

安うりはせぬが長女は厄近し
うちの溝詰まらせ隣繁昌し
ゴミ箱はフタだけふいて新春になり
圭井堂
克枝
宜左子

妥協せぬ頑固なタビの右左
同性として恋知つた娘が不びん
ハネムーンなのに美人へ目が移り
古美術にされて仏飯忘れられ
日めくりの早さを俸せとも思ひ
俺達の子だ望むまい望むまい
一本ももつれず百足急いでる

若本多久志

横に這う蟹宿命に逆らわず
うつとりとする愛があり無一文
一秒の合掌自分の仏が見えてくる
野良犬の誇り鎖の音がな
かがり火へ鮎は自滅の道選ぶ
貧しさは父のしていた通ります
新聞が来て郵便が来て誰も来ず

一三夫
千代
実男
弘実
菁居
弘生
鉄舟

香典も千円ですむ人が死に
「勝つんやで」ふるえる妻の手握り
荒廢の寺の哀しや美しや

川村 好郎

上位下位二人がそれでいいのなら
短所をつけば僕の短所にもひびき
素顔とは耐えた涙の通るとこ
預けてさえおれば銀行お気に召し
たすけ合い年末だけの仏性か
本当の涙は腹の中へ落ち
ダイヤルを中途で止めて恋終る
ほんとうは歩であり金の貌をする
ふとんの隅をたたいてくれる母米寿
コンパクト閉じてノックへ身がまゐ
ふり向いてみても足音だけの僕

柳 秋志
文 秋
旅 風

喜 由
文 秋
千 翁
圭井堂
阿 茶
鯨虎狼
千 子
鬼 遊
曉 童
芳 仙
滋 雀

西尾 梨

五十年起伏向い合つても無言
人工着色ここにもあつた三面鏡
あたにかい窓を少年見て通り
政見は頭のさがる人ばかり
怒り持つことも忘れず進まんか
送られる長さをベルに救われる
妻の留守地球は停止したごとし
市民税陸橋ばかり歩かされ
わたくしを叱る余裕を取戻し
力一杯笑顔を見せているベツド
白鳥の水尾が寄り合い春にする
放されて怪訝な犬の目と出合い

千 草 千 鬼 吐 正 醉 千 奇 公 ひ
梢 右 代 遊 来 朗 々 翁 作 さ
お 遊 来 朗 々 翁 作 さ

正本 水 客

石段の中途で鐘に追いぬかれ
花道のない宿命を進まねば
やわらかく払えば冬の蠅が触れ
あたにかい窓を少年見て通り
ポーナスもないのでのんびりする
妻病めば
呼吸つめていのちを合やす久しぶり

柳 里 葵 千 明 薫
志 風 水 代 朗 風

川柳塔賞候補作品

清水 白 柳

追い羽根が比叡の雪を引き寄せる
本當の涙は腹の中へ落ち
盃を素直に受けて妻も酔い
お愛想がないので皆んな寄つてくる
つらあてかどの盃も女受け
噛めば蜜したたりそうな耳たぶよ
冷蔵庫あれば猫も鼻を入れ
一本ももつれず百足急いでる
退院に思う
余生まだ遥かな雲の如うごく

杜 鮫 千 好 史 醉 鉄
的 虎 梢 郎 好 々 舟
い わ を

或る瞬間愛も打算の翳を持つ
老夫婦縦に並ぶ歩乱さな
風の音風の中なる男親
この人へ賭けて見る気の足袋を脱ぐ
亀裂した愛を繕う糸がない
なまぬるいスूपをけさも愛渇く
尾を振つて捨て犬心あざけない
逆らえば雨はわたしにだけはげし
あなたとの距離が伸びない縮まない
プラトニックラブで退屈して別れ

真 君 不 史 修 痴 美 笑 淨 弥
砂 子 朽 朗 史 亭 栄 子 美 生

戸田 古 方

白砂青松コーラのビンが破れている
朝破つた茶碗一日ひつかかり
季節ものの季節に喰べて有難し
俺でなきやつかぬライター俺のもの
切られてから爪は不浄に扱われ
拝観料払うて拝むのを忘れ
変装が私に似合う十二月
咳止むを待つて話のつづきする
ばんやりとしていて遮断機また下り
うんち今朝も出ずラッシュの人と

政 隆 満 輝 幽 良 柳 葉 露 一
己 子 津 親 玄 枝 子 声 扇

橘 高 薫 風

股火してひとのキップをとり上げる
一夜浸けだけで六三三が済み
よき人にめぐり会えたりペンを持つ
俺でなきやつかぬライター俺のもの
二十年続く賀状のみあたらず
幸福なムードでないと知るカメラ
びりびりと胡椒のきいた嫁の味
妊らず妻は夫婦の詩を綴り
焼きいもの値に親しさが消えてゆく
スパルタで育ちペコペコして仕え

虎 万 芳 輝 満 美 醉 智 芳
城 竿 子 親 子 栄 歩 子 月

川柳五十三次 (一)

富士野鞍馬

序

東海道五十三次といえは、十返舎一九の「東海道中膝栗毛」の滑稽本を思い起こすのであるが、これは享保二年（一八〇二）にはじまり、文化三年（一八〇六）の五編で、それには四日市から伊勢参りになっているので、石薬師から大津までの宿駅については書かれていない。飛んで京都へはいるにも、奈良街道から入っている。

天保四年（一八三三）に完成された、安藤広重の五十三次作品は、世界的の名画になっていて、親しまれている。広重の外にも豊国、国貞、等十数人の作品が残されている

が、五十三次全部そろっているのは広重だけなのである。

また艶本の五十三次ものが数種ある。五十三次となると、これらの文、画、作品を見て、誰もが一度、この道程を徒歩であるいてみたいという感情も興ってくるのである。

江戸川柳の作家も、やはりこれに深く興味を持ち、それぞれの五十三宿駅を、十七音詩に詠んでいるので、それをひろい集めてみた。その句々に、その宿々の名所、旧蹟、伝説、物語などを附説、評釈して、この「川柳五十三次」を編成したのである。江戸川柳の興味とともに、心の中で五十三次をあるいて

みることもできるであろう。

五十三次

東海道五十三次というのは、江戸日本橋から京都三条大橋に至る道程の間にあった、伝馬などを次ぐ、五十三の宿駅のことで、これは慶長六年（一六〇一）に定められたものである。

慶長八年には江戸に日本橋ができ、ここから京都三条大橋まで、五十三の宿駅を経て百二十四里二十四町（四九〇・四キロ）であった。その道程一里（三・九キロ）ごとに一里塚が築造され、榎が植えられた。

雲の上までは榎が百二十

寿山（二六七五）

と川柳に作られている。京都を禁裏があったので「雲の上」と詠んでいる。厳確にいうと、宮、桑名間は海上七里（二七・五キロ）であるから、この数は当たらない。

また東海道十五カ国のうち、伊賀、志摩、甲斐、安房、上総、下総、常陸の七カ国は、この五十三次に関係はない。そして東山道の近江を通らなければ京都へ入れないのである。

この行程は徒歩で十四、五日かった。今

の国鉄東海道線というのは、熱田（宮）まで東海道に副って走り、それから京都までは東山道（中仙道）を廻っているから、遠廻りになっている。すなわち五十三次の里程は四九〇・四キロだが、国鉄線は五一〇・九キロである。

東海道は日本の大廊下 木質（九七二）

と川柳に詠まれ、また五十三次を、

雲井まで登るはしごは五十三 松杜（八二二九）

紫へ来る駅路も五十三

松戸（九九一八）

—紫は江戸—

雲井まで横にねじれぬ五十三

恩師の歌碑の前で

五月三日岡山県下同人懇親会に出



（写真は岡村久志良氏と筆者）

早牛（二二一五）
五十三花から花のはし掛り
十九層（二二一五）

五十三花から花の長廊下

三箱（二二〇三）

—花の都 花の江戸という—

蜻蛉の背筋を五十三に割り

巨眼（二二一〇）

—蜻蛉は日本國の見立—

おはぐろを五十三次もたせたり

（明八梅二）

—郵便下向—

などと、いろいろに洒落て詠まれている。

ついでに、これは模景であるが、

ふじをいけどって御庭へ五十三 磯川（三二二四）

馬駕も入らぬは江戸の五十三

豆人（五〇一七）

五十三次日帰りの御遊覧

露堂（二二〇三）

五十三次を春日野江戸で見る

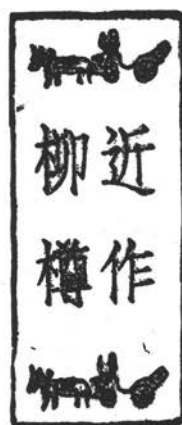
玉簾（傍三三）

という川柳がある。これは尾張の徳川宗春が、江戸の下屋敷、牛込外山御殿、十三万六千坪という宏大な庭に、東海道五十三次の模景をこしらえ、三浦屋の春日野太夫を根引してここに置いた。それを詠んだのである。

席する機会に開会前の時間を割いて岡山駅からタクシーで約30分位の邑久町に大学時代の恩師故古武弥四郎先生のご生家を訪ねた。数年前から邑久町在住の柳友岡村久志良さんをお願いしていた事が実を結んだわけである。先生が中学時代までこの生家から通学された古く整えられた質素な農家と思わせるたはずまいである。庭先きに御誕生

出地と記された碑が立っている。この生家から天王山と称する小高い丘の上まで歩いて約十分間のところ。眺望絶佳。備前大平原を一望におさめる。そこに先生の歌碑が建っている。先生を慕うてやまぬ全町民の奏仕ではるばる海を渡って四国からこの山上まで運び上げた巨石である。晩年の先生のこの親筆になる和歌が刻まれている。

「通学乃昔なつかしかへり来てここ
ゆ見おろす岡山の道」
（中島生々庵）



北川春巢選

岡山県 賀芳月

甲斐性のないのが似合うモーニング

日曜のプラン私だけに無い

歌謡曲批判するのも評論家

豪勢な普請大工にも抹茶

鳥取県 両川洋々

会えばまた泣くのを知っていても会い

三つ目の恋も振られてからの酒

お大事になどと薬局また儲け

離婚する金も勇気も無い平和

大阪府 小谷葉子

オンザロック心の扉 明けんとす

ワンテンポ狂い四季咲きの恋に濡れ

青春は炎えるふる里のある限り

飾られた愛の言葉に盗まれし

大阪府 阪上十止庵

終電車もう悪友の顔でなし

口八丁それも内助のひとつにて

テレビ買って大銀行に借りが出来

浦島のなげき生家はビルと道

下関市 志賀木石

流行へおばはんも出す膝坊主

飲みながら聞こうと社長苦勞人

さえずりへ邪魔なレコードかける茶屋

爛がつく堅い話はやめようぜ

東大阪市 斎藤三十四

定年が孫へ過保護の日を過し

五十五数えて孫と風呂上る

宴席で軍歌五十男が声揃え

就職の弁遊んでは身体に毒だから

島根県 堀江芳子

子に気兼ねする日もあって子の背丈

戒名も知らず法事の客でいる
漬物のうまさが届く隣りから

大阪府 江 城 修 史

反抗のことさら煙草にむせて見せ
青い鳥私のそれは妻に尽き
生きる汗春愁とやはまだ知らず

八代市 船 木 史 朗

関係が無いからドラマにも泣ける
見えすいた嘘へ女はすがりつき
仲裁は八方丸くした積り

竹原市 三 宅 不 朽

臆病な魔女爪を染め髪を染め
母と子の童話父はさびしいぞ
灯明をみつめる母となり給う

岡山県 武 元 柳 子

万博の動く歩道も交通禍
うそついてまでも出てきたことを悔い
ふる里に筒食べに露食べに

広島県 南 条 露 声

新調のネクタイだけが春衣裳
おそ咲きのようにうちの娘恋をする
ジャンケンで甘えて茶ワン下げさされ

兵庫県 荒 井 良 枝
あんな子が欲しい日曜の親子連れ
ウインドへ出て流行の柄となり
組立ての家に淡い灯がとまり

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

わかめ干す風は海から吹いて来る
日本に減反という新語出来
招待状紙背の文字が読めぬので

大洲市 堀 内 曉 風

息切れをしても云うだけ云う頑固
使い手によつては缺すねて見る
エリートと言われうちでは甘えん坊

竹原市 楠 貞 子

花の宴好きなお方の黒田節
嘘言うて円満にすむ不合理さ
心の中は洗えぬ日の長湯

今治市 今 井 松 花

証拠湮滅出来て黒幕呼び出され
入院をして老妻に甘え癖
着物著て坐れば膝にある色気

大阪府 岡 部 シ ゲ

野菜高 野草料理が復活し

太陽の目に入ったゴミが手をやかせ
汐干狩貝を撒く人ひろう人

大阪市 松岡茶々坊

子も孫もよってたかつてじじいにし
退院をしてから病重くなり

幸福は相手が天使のように見え

鳥取市 藤本佳女

心まで傷を負うまい障害者

天然パーマ亡夫に似て来た子にあわて

河内長野市 森本黒天子

万博の電飾だけにドライブし

平凡なところは息子も負けて居ず

新潟県 高野不二

パンカラが昔はいたパンタロン

捨てるには惜しい荷物をもて余し

東大阪市 宮西弥生

断ちきれぬ愛の交差に立つひとりぼち

中年の恋に邪魔する知恵があり

京都市 丹羽英二

素直さが胃カメラ案に呑み下し

胃カメラへ医者と患者の意気が合い

大阪市 水谷竹荘

悠々自適出来る定年うらやまれ
シグナルの赤に団体わけられる

大阪市 半田夏生

一片の辞令が重い荷を背負い

知人の結婚(一句)

万博の春に羽搏け新夫婦

尼崎市 中谷利美

酔うている時はやったるぜと思ひ

うっかりと乗った女房の口車

大阪市 西本保夫

タバコ吸う女に平社員追い越され

万博の駅に降りるともう走り

松江市 津川紫吻

万博の人出凡人みな疲れ

太陽の塔へ一〇〇%口あけて

東大阪市 落合思月

さよならも云わずうしろも見ぬ男

諦めて妥協になれてサラリマン

岡山県 武内雅堂

老いの目に孫の制服よく似合い

子の重荷かかえ定年来てしまい

鳥取県 川崎秋女

その勇氣はめて結果をいましめる
切れぬ子で幸せ乗つ取りの母思ふ

河内長野市 井 上 喜 醉

頂上へ挑むマイカーまだ月賦
垢抜けはしても直らぬ国訛り

七尾市 松 高 秀 峰

サンガラスはずしてやさしいママとなり
生活のゆとりが見える庭が出来

大阪市 小 出 智 子

スタイルブックモデルに似合う服ばかり
本人に見せたい程の葬儀なり

大阪市 河 野 君 子

拒否反応起こす皺でも化粧する
ゆりかごに似て船底で母を恋ひ

大阪市 黒 田 真 砂

撫子が生れ変ってミニをはき
黙ってても心通じる春の部屋

松江市 村 松 醉 歩

知事若し後進県の田を埋めた
釜ヶ崎の友情唾のごと黙る

八尾市 高 杉 千 歩

太宰忌に父の年よむ豆むきながら

さり気なく譲り小さな義理をたて

岡山県 本 倉 英 峰

ほしくても残して次へフルコース
ライバルと彼女の動き気にかかり

竹原市 生 信 笑 子

やれ足が腰がと万博から帰り
現実にもどされて出る吐息

八代市 船 木 き よ

上役が変れば趣味も又変り
失恋へも一度カード繰って見る

和歌山市 仮 家 和 美

噴水のみ真昼の倦怠ふきあげる
日目を過去に追ひやるニュース見る

和歌山市 中 筋 朋 子

傷心を雨の夜景にふりおとす
幸せをかみしめている暇がない

和歌山県 ふ き あ げ 虎 城

想像のままにエデンに踏み込まず
賭けの町やっぱり暗に残置灯

鳥取県 有 田 鹿 の 子

五十路へやすらぐ桜がふりかかり
遠い子へ渡してほしい虹の橋

竹原市 楠 美佐雄

船頭の二世にかけける鯉のぼり
どん底を暮しの夢が頭張らせ

大阪市 河 原 林 比呂路

退社ベル仮面をつけてネオン街
良心のかけらも持たぬボスの顔

大阪市 堀 口 欣 一

万博のついでに本山へも詣り
健康はラジオ早起鳥で起き

東大阪市 坂 上 山 椒 坊

金婚へ二人三脚締めなおし
葉桜になって出かける車椅子

守口市 野 呂 杜 月

北国のドット来た春見て廻り
寛容と忍耐つづく我が余生

島根県 榊 原 秀 子

倅せは相談される親であり
母の日へ風吹きぬける子なき妻

島根県 錦 織 文 子

体臭に馴れて看とりの夜が更ける
二合瓶かたむけ旅窓みなみどり

広島市 植 田 英 詩

アイシャドウ拭えば良女の昼があり
道聞けば駐在バイクに乗せてくれ

島根県 大 峠 可 動

病床の花を枯らして壺ひかる
愛情がこぼれて生きる君の瞳だ

寝屋川市 福 富 隆 子

あのように甘えてみたり娘等の恋
ご無沙汰を雨の日清算するときめ

羽咋市 三 宅 ろ 亭

極限を知れと心が叱っている
ガタのきたテレビ怪談のように見え

今治市 原 田 輝 親

アイディアは良いが金にはなりません
副作用ない生葉が煮えつまり

今治市 古 野 伶 人

ボスが住む順に道路が舗装され
損得に無縁本当の事が云え

今治市 伊 藤 一 郎

お菓を頂いて飲む弱りよう
酒飲めぬ花見は杖にすがって来

今治市 大 本 バ ッ ト

マイカーで草薙りに来る過疎の村

人と猿網を隔ててリンゴ食う

鳥取県 林

露 杖

高知県 山 川 勝 子
消火器は埃まみれで台所

アイリスの花は寂しきアイシヤード

鯉のほりおむつも共に風はらみ

三キロの行列して見る月の石

仙台市 川 村 映 輝

羽曳野市 麻

野 幽 玄

その人の名はと許す気らしい母

艶のない女煙草がおいしそう
海難の現場によせる波静か

妻がまた気嫌そこねる釣シーズン

堺市 栗 本 藤 持

今治市 渡

辺 南 奉

なすの苗こんな小さな幸に酔い

学連もなお卒業に未練あり
農に生く村も最後の牛を売り

妻のいる限り平和な灯がともり

大阪市 花 田 繁 子

新宮市 大

矢 十 郎

補乳びん乳房の温みにして瞞し

残すのも残されるのも嫌や老夫婦
同じ値で焼き芋の方やめにする

気が付けば娘九つ祖母を抜き

大阪市 鈴 木 生 仏

大阪市 白

石 良 圭

夫婦してもろくも風邪によりきられ

老人は毎月見たい大相撲
待ちかねた万博を見て三日ねる

たこ焼を食べ食べ定時制帰える

大阪市 吉 野 志 津

西宮市 丸

山 孔 一

若気の至りと言える年齢が過ぎ

万博が味のオリンピック又たのし
出産届胸はずませる若いパパ

万円札バスに乗ろうか歩こうか

大阪市 田 中 多 幸

岡山市 谷

森 和 風

七光り桂馬のように飛ぶ人事

儲けには近く寄附には遠い耳
農機から省けた手間が日給取り

農業に未練残らぬ地価ブーム

大阪市 木 村 渚 水

もみくちやにされた女優のオープンカー
閑居して小人園芸に熱を入れ

守口市 岸 本 豊 平 次

子には子の夢あり澄んだ眼を信じ

神戸市 来 住 タ カ 子

欲望の闇涯しなく鬼が棲む

熊本市 黒 田 緑

席をゆずられて考えさせられる

島根県 中 島 英 子

体臭に馴れて白衣の職に生き

鳥取市 藤 本 鎮 也

ゴマすりと言われる程に気を配り

鳥取市 藤 本 和 宏

詫びる気を反抗心におさえられ

鳥取市 藤 本 恵 子

屁理屈を母はチョップで吹っとばし

島根県 大 森 孝 華

新緑のぼたんへ撮って嫁姑

大阪市 藤 田 頂 留 子

助言者のいいなりに打つへボ将棋

宿毛市 瀬 田 美 知

高工生下宿

子にあわす食事ヒップがまたのびる

泉佐野市 大 工 静 子

よその娘の着付けへ逝った子を思う

大阪市 平 井 露 芳

プロ野球八百長事件

高給があだギャンブルのわなに落ち

大田市 藤 田 軒 太 楼

焦点をぼかすに年功積み重ね

鳥取市 近 藤 秋 星

老人クラブの総会らしくない気焰

岡山県 山 田 止 水

鍵っ子の道草日課の中にあり

大阪市 岡 本 ま さ ひ ろ

咬み殺す春日遅々の退社ベル

貝塚市 行 天 千 代

春の夜月が家までついて来る

鳥取市 山 形 春 海

病む母を訪えばアベコベ卵くれ

笠岡市 山 本 柏 生

兄弟へ他人のように金を貸し

愛媛県 西 田 夫 生

この年でまだ子の脛はと足に灸

竹原市 岡 本 春 昇

金魚すれちがう互に目もくれず

下関市 志 賀 汀 花

鯉のぼり窓に祝うて2DK

神戸市 横 山 孜 孝

お色気はミニより和服と言うお歳

和歌山市 吉 野 富 子

手不足へ風邪までどっかと腰を据え

和歌山市 田 中 正 夫

スト解決また乗車賃上るやろ

和歌山市 増 田 め ぐ み

花吹雪幸せすぎた友の墓

米子市 関 谷 成 子

化粧して衿が気になる病上り

八尾市 飯 田 一 治

長生きをしそうなしみが出来ました

米子市 増 田 竹 馬

定年期の栄転檜山へ行くつもり

池田市 石 井 文 三 郎

リュック背にふきふき食べる信州そば

島根県 東 原 福 子

淋しさの果てに見つけた詩ひとつ

浦和市 吉 岡 茂

座席指定空いてる車両通り抜け

宿毛市 山 本 窓 花

一と晩の宿借すお札のしわ伸ばす

今治市 真 山 国 彦

染めること止めたら母は急に老け

高槻市 山 田 ス ミ 子

清掃車朝から派手な音で来る

伊丹市 春 日 青 争

わからない法話つまらなし有り難し

大阪市 松 岡 進

押し売りが去るまで犬はほえつづけ

大阪市 広 畑 賛 平

閑居してしょうことなしの手内職

大阪市 今 井 隼 人

田舎では親は汗水子らはスト

大阪市 村 島 秀 村

花の下こども忘れてママ踊る

同人吟

秀句鑑賞

——前月号から——

若本多久志

子が継がぬ鍬大切に光らせる

八木千代

鍬の柄には、祖父の代、父の代からの尊い汗と脂が込み込んでいる。手入れの行き届いた鍬の先は、今もお光っているが、悲しい断絶の時代を迎えて、子等はこの伝統を継ぐともしないと、農婦の悲しみが強く詠まれている。

悪人になれず善人にもなれず

本田恵二朗

人間に良心のひとつかけらでもある裡は、悪人に徹することは出来ない。それなのに又一面、とかく善人になりたがるのも悲しい人間の性であろう。この句主が常に厳しく自己を見詰めておられる姿を尊いと思う。

多すぎた言葉へ自戒の夜を刻む

久米奈良子

こうした句想は、今までによく詠まれた境地ではあるが、新しい手法が鋭く、ひとの胸を打つ。

父の墓洗えば洗うほど淋し

越智一水

われわれ明治人間や、戦中派までの人にとって、親の墓を建てるということが最大の孝養と考えられ、この句主も又、心の安らぎを父の墓に求めたのであらうが「洗えば洗うほど淋し」と限りなき父への思慕のみが残った訳だ。考えさせる句である。

養虫も孤独自分でぶらさがり

森井菁居

苦しい人生を生き抜いてゆく折り節に、耐え難い孤独感や虚無感に襲われることは、誰しもが味わわれる。そんな時に樹々の枝にぶらさがる養虫の習性を見て、ふと自己を大きく見直し、再び険しい人生行路へ前進してゆく姿を尊いと思う。

凡人として恙なく棺に入り

香川酔々

「賢人に成ることは易く、凡人に成ることは難し」という言葉があるが、凡人——即ちあたりまえの事をあたりまえに出来る人——こそ稀少価値とでもいえよう。そして平々、凡々と棺に入ってゆく人。おそらく句主もこうし

た人間になりたいという理想を詠まれたのではないか。

生きている悲哀一番可愛い自分

神谷凡九郎

生きてゆく苦しさの中に見出した自己愛、これは近視眼的な打算による愛ではなく、深く広い大きな意味をもつ。真に自分を愛することを知らない者は他を愛することも出来ないし、他からも愛されないであらう。

寄りそうてすべて納得したい妻

小野克枝

「上役とのマージャンでやむを得ぬ外泊だ」と言われれば「そうでしたの」と善意に解釈し「同僚とのつき合いで……」と言い訳されれば、遅い帰宅も素直に納得する妻の姿程、いとしくも又、可愛いものはない。この句主の良妻ぶりと、幸福そうな夫婦の生活に羨望さえ感じられる。

花咲き花散り亡妻の三年忌

田村藤波

「年々歳々花同じ、歳々年々人同じからず」人間の死は順逆を選ばずとは言え、この愛別離苦の悲しみは四苦八苦の中でも、一番痛恨事であらう。

上八がよく生きているが、下五の三年忌は三回忌が正しいのではないかと思う。

近作柳樺

秀句鑑賞

—前月号から—

川村 好郎

エプロンへ輪ゴムを溜めて妻達者

安藤 桂仙

女は世界の田地であると言った聖者があ
る。女性上位という言葉をもう一度考え直さ
ねばならぬように思う。エプロン、輪ゴムを
溜めるという具体的なものを用にして、女性
の家庭に於ての役割を主張している。

中年の恋愛表情なく迫る

宮 西弥生

「三通話話して好きとはまだ言えず 洋々」
の句があったが、中年の恋はそんなゆっくり
した道程を履まない。「表情なく迫る」とは
色々のことが含まれていて妙を得ている。作
者が経験したのか、経験しつつあるのか。若
し想像句であればうまい。

打明けぬ訳は万事にくだい父

阪上 十止庵

くだうなつたと自覚していても若い者から
みればくだいのが老人である。経験による自
信というのか。老人も反省せねばならぬが、
若い人ものけ者にせず、打明けてほしいと訴
えている句である。

貧しさよさらば僕には明日がある

大峠 可動

初め読んだとき、されど、僕には明日がある
の誤りではないかと思った。次に貧しさよで
切つてさらば（さあ！の意味）と判断した。
結局貧しさよさようならという意味のさらば
とわかつた。この辺が日本語のむづかしいと
ころであり、句を詠む上にも読むのにも気を
つけねばならぬ点であろう。力強い句である。

待ち呆け心に余白まだ残し

江城 修史

待ち呆けの句は沢山詠まれているが、心に
余白まだ残しは複雑な気持をうまく表現して
いる。腹が立つとか、じっとしていられない
とか云わずにそれ等を含めている表現がよい。

物価高小鳥も犬も猫も飼ひ

錦織 文子

物価が上る殊にあり余る米が騰るといふ矛
盾もあるが、消費者の方にも高い高いと不平
を云いながら、観光ブームでありどの食堂も
満員である。不思議な世相であると皮肉った
句であり、ユーモアも含まれている。

冬堪えて来たのに雑草引抜かれ

麻野 幽玄

平社員はつらい。働いてつらいこともジツ
ト耐えて、そして定年になればあっさり雑草
の如く引抜かれてしまう。悲感し給うな。雑
草は雑草なりに精一杯生きて来たのである。
そしてもう一度大地に還れば他の草木を生か
す肥しの一片にもなるではないか。こんな風
にこの句は教えている。

川柳家必読の「笑いのテクニク」

秋田実主宰・不二田一三夫編集

八月号「漫才」

定価 百円
送料 六円

発行所

大阪市生野区勝山通六ノ七九
電話大阪（七一八）三二一八

抄 輪 九

富田林市 定金冬二

梳く髪のあわれは人を疑いぬ

六月は 花の涙を買い給え

海へ一個のリングを投げる対話かな

神戸市 来住 タカ子

戦いの好きな男の持つマンガ

嘘つきの男の光る喉仏

愛の罫に落ちてても悔の無い眸

八尾市 高杉 鬼遊

唇を許し外壕埋められ

暗闇を味方におんな攻めてくる

大阪市 神谷 凡九郎

繰り返す戦争の悲しさ国があり人が居る

物価の外に政治家だから住めるのさ

竹原市 時広 一路

太陽の直射が妥協許さない

富田林市 岩田 美代

整形をして仏像の歴史剥ぐ

倉敷市 水粉 千翁

人形へ寝返りを打つ灯がゆれる

岡山県 三輪 康明

明日への距離へ私の影が病む

八尾市 香川 酔々

煩惱の昇華よ 青い空探す

松江市 柳楽 鶴丸

方程式のない幸せを追っかける

枯れ枝の誤算 みの虫火葬され 岡山県 山田 止水

持てるもの捧げつくした灰散りぬ

島根県 小砂 白汀

紫煙みていても哲学でてこない

豊中市 戸田 古方

校庭に人影一つない暑さ

松原市 谷垣 史好

背信の台詞貧しく耳朶を打つ

大阪市 江城 修史

他人様のしあわせ盗みたくなった日よ

出雲市 王 紫

良い方に解釈をして受けた役

倉敷市 小野 克枝

さよならもいわず五黄の女去る

大阪市 阪上 十止庵

たけのこの情性よ土を割ってから

竹原市 森井 菁居

煩わしいからサングラス夜もかける

今治市 月原 宵明

振り向けば振り向く犬の眼に出遭ひ

竹原市 三宅 不朽

大阪市 宮尾 あいき

岡山県 武内 雅堂

大阪市 大坂 形水

さいころに似ている父に気がつかず
家計簿に書けない金も母は要り
東大阪市 落合 思月

八代市 船木 史朗

藤井寺市 西 いわを

海よ 熊本県 有働 芳仙

和歌山市 垂井 葵水

女を逃げる先に女は待っている
大阪市 金井 文秋

焼けという便りを今日も読み返す
下関市 桜川 不水

ごまかしの世だごまかしの色を塗る
大阪市 本庄 金三

ラブシーン寝ていましたと猫あくび
下関市 志賀 木石

小心の正視も出来ず人を恋う
東大阪市 竹中 肖二

蟬の殻 俺も脱きたい殻を持ち
大阪市 島野 大吉

ねばり気がないのか又も職変える
小松市 馬場 魚山

亡き父の表札外す日を振りぬ
島根県 堀江 正朗

六十に近く絵筆に肩がこり
大阪市 宮地 双楽

ひととおり見えぬ色でも聞いておく
京都市 松川 杜的

農魂もゆるむぞ 米価審議会
大阪市 正本 水客

瓜生石仏
無住には惜しい彫りあり求福寺
大阪市 小谷 葉子

流し燈ろう 人呼ぶ如く動かない
愛媛県 渡辺 曉童

あり余る夢買いに出る虹があり
大阪市 箱石 久情

フランスパンをかついでレジスタンスが帰る
岡山県 出原 敬一

逢えばまた明石への鎖 不倫とも
大阪市 有信 新之助

清水白柳選

紺碧の海 女破調の笛を吹く

倉敷市 小幡里風

太陽の真下で青年の落書す

岡山市 川端柳子

連想の輪が 空間に手をつなぐ

堺市 墨作二郎

広場に馴れる鳩の緑の悔を積む

十本の指に挫折の爪つくる

大阪市 橋高薫風

生も死も七月 情熱の詩人

蜩ざらりと 朝の手ごたえ

悔恨や 眼鏡をかけるだけの耳

天人の彫刻 村雲が微笑する(弔句)

清水白柳

今月は何故か低調だったように思った。没にした句を二、三見ていただいて納得してほしい。『虚夢に酔い虚像を追うて六十年』この作品は文字の遊びに終わっているように思う、虚夢も虚像も少しも生かされていない、それはありふれた事柄を重い表現にしたのに過ぎないからであろう。

『心静かに見せ戦っている女 女』句意はよく判るが推こうが足りない。殊更に破調にしてまで強調する程の内容ではないように思うのでリズム感のある作品に考え直してほしい。

『自ずから輝く知性身につけたい』これは作品にする素材である、ここから発想して苦しまなければ作品にはならないであろう。

『緋牡丹が雨にたたかれ助け呼ぶ』作者は助けを呼ぶというところに焦点を置いているのは判るがそれだけに終わっているのは見詰め方が浅いからである、緋牡丹自身になって叫ばねば読むものの心を打つ作品にはならない。

『口ぐせにらしくらしくと襲けられ』一応はこれでもいいのだが、この作者にはこうした作句方向ではなくて純真な若さの発渾とした作品を書いてほしいので敢えて没にした。

『孤独の晩春枯葉との対話』この句の作者は何を訴えようとしているのかわからなかった。孤独、晩春、枯葉、対話と何の連けいもない文字を並べただけのように感じたのだがこれではいけないと思った。

『人なれば死んだ方がええ云われまい』この一句だけを読んでもシージャックの句だと判る方は少ないと思う。シージャックの句二句と並んでいたのでわかったのだが際わ物の作品は、よほどすぐれた句でないといけない。

『頂上を目指して下りのない歩幅』何かはがゆい感じのする作品である、作者の言おうとしていることがわかっていながらどうにもならないのは、矢張り表現力の不足ということであろう。

虫明の宿



(左から西尾榮・川村好郎・大坂形水諸氏)

西尾 榮

五月二日新大阪駅十六時二十八分発特急、しおじ3号の6号9Bという切符が、白柳さんから、速達で届けられたのは、四月二十八日のことであった。

切符の落手したお礼の電話をすると、同行者は生々庵主幹と白柳さん、好郎さんと自分の四人で、形水、薫風の両氏は岡山の会場で落ち合うことになっているとのことであった。その時、自分は新大阪駅でなくて、大阪駅から乗るかも知れないことを話しておいた。新大阪駅は地下鉄を下りてから、途中にエスカレーターはあるけれども、相当距離があるので、環状線と一つ違いのホームで乗れる大阪駅から乗車しようと切符をもらった時から考えておいたことだった。

大阪駅のホームに立った時は、発車に丁度二十分前だった。五番線のホームには、十七時発、みまさか3号に乗る人の列が幾筋も出ていた。ホームに行つて、朝日新聞の将棋名人戦を読んでいる私の耳に、十六時三十分発、しおじ3号の自由席にご乗車の方は、始発駅新大阪駅で、既に満員の状態でありまして、ご乗車の方は、新大阪駅の方へお越しになってご乗車をおすすめ致します。

新大阪駅へは八番ホームから発車しております。次の駅が新大阪駅で、およそ四分で到着致します。というアナウンスが何回もくりかえされた。時にはおよそ四分が、およそ三分に変わっていたことも面白きいた。特急指定席は有難かった。6号車は軽食堂車と半分ずつになっていた。

乗車すると、同行の三人が鍵の手に座っていて、主幹の前の席が空いていて挨拶もそこそこにその席にすわった。白柳さんは、冠っていたベレー帽を脱いで「席がわからなかったら、いかなから帽子を冠っていたんや」と脱いだベレー帽を網棚の上へ投げ上げた。

白柳さんなら、反対に脱いでいくくれた方が、よっ程解りいいのじゃないかと思つたが、慎重な私は、そんな失礼なことを言わずに、もっぱら主幹に句集の序文のお礼をくどくどと言っていた。

車中では、小松國氏の声の出ない客体の話や、例によつて毒舌を交えた川柳の話、又川柳塔社のスタッフを初め同人一同が余りにも仲がよすぎる。もつと仲が悪くなれば、切磋琢磨があつていいのじゃないか「仲善きことは美しきかな」許りでは、如何なものであるうか等と話した。

間もなく、座席の横を前車の方へ行く人が多くなつた。時にはアベックも幾組があつた。それは前にも言つた前の車が軽食堂車になつていたからである。ドアの開閉がある度に良い匂いが漂うて来た。何時もなら、誰からともなくアルコールの誘惑に負け立ち上るところであるが、神妙に社の話、岡山の話に夢中になつていた。というのも岡山へ着けば、今晚泊まる虫明(むしあげ)という漁港の旅館で、新鮮な旨い魚をたっぷり食わしてやるという餌の為であった。

暗くなつてきた窓外には雨らしい気配がした。目をこらすとやっぱり雨だった。

愈々生々庵の本領を發揮してきたと、期せずして四人の口をついた。

十八時四十分岡山駅に着いた。駅は新幹線の工事の最中で、どこが出口か迷うほどだったが、人の流れに従ってゆくと、出口に出た。そこには久しぶりの、久米雄さん、久志良さん、三井坊さんの三人がニコニコして待っていてくれた。挨拶と握手で久瀾を救して、タクシীর列に入った。久米雄さんはずいぶん良い顔色をしていた。自分はすかさずやってきたという、素直にみとめた。

四人乗りの車には、助手席に道案内の久志良氏が乗り、主幹、好郎、栞と三人後ろの席に乗った。もう一台のタクシীরには、久米雄氏、三井坊氏、白柳の三人が乗った。

薄暮の岡山の広い通りを幾曲りかすると、間もなく旭川にかかる相生橋を渡った。

この向うの端が後楽園ですけれど、私の祖父などは、御後園と申していました。先祖は武士の端くれで、お城に務めていて記帳などをやっていたんですという久志良さんの話。世が世なら誰かが言う、いや単なる藩士ですけれど謙遜された。

車が二つに岐れた道にさしかかった時に、こちらの道をゆくと、何とか温泉へ行く道で、と生々庵と好郎が何時か来て泊った温泉宿の赤い布団の話をした。

行く手に墨絵のような備前富士が見える頃、干拓で出来たという岡山平野はもうすっかり暮れていた。もう一つ早い列車で来られていたら、明るいこの景色を充分説明出来

たのにと、それでも何とか平野、何とか平野と、その当時の土木奉行の名のついている平野の名前を暗い中で、久志良さんは説明してくれた。

西大寺の町へ入ると、四つ辻の信号の赤も緑も、すっかり夜の光りとなっていた。

吉井川の橋を渡る時に、有名な会陽（エヨ）の裸祭りの西大寺の塔と屋根が黒々と聳えて、久志良さんが乗り出すように助手席からふりむいて指をさしてくれた。

運転手と久志良さんが、虫明行の道のこととやりとりしている中に、車はむずかしい字の邑久町へと入っている。

『それ、それ、左前方に大きく三つの灯が見えます。その中の一番手前の灯が、私の家の灯ですけれど』と久志良さんは、なつかしい我が家の所在を教えられてお家のありかを確認された。ガソリンスタンドの明るいところへ出た時、ここを右へ入ると、邑久町銀座ですけれど、という笑われた。

今宵の宿の虫明は邑久町の小字であるときいていたので、もうすぐに着くかと思っていたが車は走れども走れども、それらしい灯りも見えず、港ときいていたのに、反対に山道を上り下りするので、好郎さんと私は思わず顔を見合わせた。

ちよっと灯の点々とする家並に入った時に、ここが竹久夢二の生家と歌碑のあるところです。もう少しゆくと鳥居が見えます。そのところにて

待てど暮せど

来ぬ人を

色紙短冊
書画用品

大隈政一

丹青堂

せやまに、まに

宵待草の やるせなさ
今宵も月が 出ぬそう

と刻まれた碑が立っています。という左手を指された。そして運転手に徐行するように言われた。明日は是非立ちよって、生家と歌碑を見ようと話しあった。

『明日は、皆さんより一足早く出て、古武先生のお墓へ詣りましょう。あの山の一番上です。こうしてお花と線香を用意してきました』と紙で巻いた花をさし上げて、主幹に久志良さんは見せられた。話の古武先生は大阪帝国大学の名誉教授で、主幹の恩師でこの邑久町出身の方である。古武先生のことについて、しばらく主幹と久志良さんの間に話が交わされた。

然し車は、坂を下ると又上った。前方に海のあることなどの想像もつかぬ暗い山道許りだった。

『虫明の港は、岡山藩主池田侯の一番家老伊木長門守忠親が、虫明港の守りとして勤番していたところで、藩の海軍の要塞という港町で、今夜の宿は、百石どり笹尾助の蛭の屋敷跡であります。虫明の町は山ふところの暖かいところが上町というて、そこに武家屋敷が並んでいました。泊る宿の杉本楼は屋根は萱葺き、巡ります堀は土堀で、切腹の間が今尚残っている由緒ある旅館であります。それから、散っているなければよいが、立派な牡丹園のあるところです』と久志良さんのガイドぶりは仲々懇切丁寧であった。

聞いている中に、車は平坦な道を走っていました。ここも武家屋敷の跡で今は畑になっていきますと話された途端に車は、やっとなって。自分達は蘇生の思いで車を下りた。そして玄関に立った。佇った玄関のつきあたりに夜目にも明るく、真紅の牡丹が咲き誇っていた。

玄関に牡丹明るく迎えられ

先にたった久志良さんは、牡丹はまだ散ってなかってよかったと、大きな声で出迎える人に言っていた。

驚張りの音がする年代の廊下を右手に、牡丹を見ながら曲ると、十畳二間の室に入った。一時間余の車の疲れを、座布団の上へあぐらをくむと、電灯に照明された数十株の牡丹が、今度は真正面から驚きと喜びの目にとびこんで来た。

もう一度牡丹の散っていないかったことを久志良さんは大きな声で喜こんだ。

客人には大輪の艶やかな満開の牡丹は何よりの御馳走だった。

丹尺に切られた羊羹が、雅な銘々皿のつて出されて、香り高いおいしいおうすが運ばれた。この銘々皿の焼物は、京都の清水焼の流れをくむもので、伊木三猿斎が初めた虫明焼という。そして出された銘々皿は、この宿の八十才になる千鶴女さんの作だと女中さんが説明した。お茶碗も亦虫明焼の逸品であった。

風呂が小さいので、二人ずつはいることにした。風呂から上ってくると、驚いたことには、形水さんが丹前姿で座っていた。さっき風呂場できこえた、口々に叫んだ大きな声は形水さんを突然迎えた一同の驚きの声であったものだ。形水さんは、一時間程前に着いてもう風呂はすましたのだと言って、美しい顔は額から頭に掛けて湯上りらしくよく光っていた。

席について考えると、三林坊さんとは初めてであった。そして

『三林坊という名がよくつづいていますなア』というたのが、初対面の挨拶になった。何故よくつづいてますなアと言うたのは、三林坊という名を何時改号されるだろうか、いつ改名されるだろうかと言うことが、いつも自分の頭の中にあっただからである。

『いやアーまだつづいていますよ、これからはもつづきますよ』という挨拶で、二人は高

く笑いあった。

汽車中から漁港の新鮮な魚につられてきた空腹は、風呂から上ると途端に鳴りだした。乾杯の猪口の一杯は、古い言葉ながら五臓六腑にしみ渡った。新しい魚の秀逸は子持ち蝦蛄(しゃこ)だった。歯にかかるくあたる蝦蛄の子の味は、車中の辛抱を充二分につぐなうに余りあった。

(以下次号)

旅行・宴会・リクリエーションのことならどんなことでもご相談ください。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

本社 東京都大田区蒲田 4-40-5

TEL 03 (733) 6951

守口出張所 守口市京阪本通 2-18

三洋電機株式会社食室内

TEL 06 (991) 1181 内線 588

昭和四十五年七月現在

川柳塔社同人

青木遊星 青山慶之助 浅川八郎 浅野芳朗 麻生アト 阿部柳太 尼見緑之助 天見幸雄 阿万の助 有信新之助 安平次弘道 池田あや子 池田古心 池田泉水 井阪東天紅 石居高志 石川侃流洞 石倉旅風 磯坂新雪 磯島三石 市岡曉舟 市場没食子

出原敬一 出原直奇 伊藤泉睦 伊藤茶仏 井上湧三 今西章雅 岩田ひさお 岩田美代 岩谷二三枝 岩本雀踊子 上田紅溪 植村客遊子 池田満潮 魚住三林坊 臼井芳仙 有働幽谷 江国牛亭 江副吐来 榎本紫 王塚祥勇 大崎秋月 岡崎秋月 小笠原青女

岡田拳法 岡村久志良 小川静観堂 小川恒明 隱岐不酔 置田ふじ 荻野鮫虎狼 奥谷弘朗 奥村丹治 奥坂形水 大崎博正 大田良子 太田鍋牛 小田垣 越智一月都 大谷喜由 大鶴八歩 大西克枝 小野有浪 小畑牧人 小浜自浪 小森娛句 大山雅城 香山醉々 香川醉々

笠原吸江 葛城伊三郎 加藤河産 加藤貞秋 金井文九郎 神谷凡九郎 賀本昇 河井庸佑 川岡靈眼子 川口弘生 川崎秋女 川竹松風 川原みのる 河端柳子 河村日満 河村瑞満 河村好郎 河内天笑 神原幸児 菊田いさむ 菊沢小松園 岸南柳 黄瀬美秋 北川春果 北高薰風 橘村一歩 木村三歩

木村千容 木村涼人 木村遠二 木山要次 木山醉升 草深半門 国弘奈良子 久米休門 藏本白梅子 黒川紫香 桑原喜風 工藤甲吉 小池しげお 小島蘭幸 小谷仙山 小砂白汀 高津徹也 高西無鬼 小西雄々 小松義雄 小島与呂志 児島義雄 小幡孤呂二 小幡里風 小林孝正 小林トメ子 小藤由多香 近藤凡生

雑賀五月勉 酒井三葉 坂井清子 酒田不水 桜川甘草 佐藤占八 佐野平八 沢田七面山 直原弘美 四方天 島居百酒 島野大吉 島野保 清水白柳 清水義介 清水谷句楽坊 城一舟 新城博也 新谷笑痴 菅井智庵 菅井馬 傍島静馬 高木桃大 高垣方里 高杉鬼遊 高橋鬼焼 高橋千万子 高橋操子

竹内圭童 竹内綾女 竹中浪二 竹浪子 竹浪子 田中狂二 田中十方 田中万里歩 田中無閑 谷垣史好 谷垣好祐 谷沢好祐 田村好祐 垂井葵波 津秋葵波 築山六花 築山快夢起 辻圭水 辻喜仙 辻城石 辻正千梢 遠山可住 土岐トク子 土岐一子 時倉求芽 友淵貴山 戸田古方

求人難

中筋三幸選

人情をからめて求人難が解け
 求人難妻はパートへ気が動き
 求人難職安今日も列があり
 叱らねばさばり叱れば暇をとり
 求人難都会に無駄な人が生き
 引き抜きにきたのも覚悟雇い入
 カップルのおとまで心配して雇い
 コンピュータ求人難へあつけなし
 求人難縁故者ばかりにハッパかけ
 求人難とにかく入社させてみる
 パチンコは満員工場は人不足
 ご用聞きの声も途絶える求人難
 求人難過去のことはふれずおき
 孔明の時代も三顧して迎え
 配達は求人難でおことわり
 求人難白衣の天使斗争中
 求人難器用大工も数に入れ
 求人難お車土工へも廻し
 求人は社の特色に力入れ
 最高の額で嘘つく求人難
 事故現場求人難の無理の果て
 求人難面接に勝手なことも聞き

オートメになつて益々求人難
 職安の事務員会社へ引き抜かれ
 求人難されど五十に職が無し
 来て見ればこもやっぱり人不足
 求人難妻はパートで若返り
 求人難青田買いより早苗買い
 求人難どこ吹く風か我が社風
 求人難迎えて送る自家用車
 社長秘書求人難へ紅を塗り
 求人難広告出したまんま年暮れる
 人が無い甥もいとこも使われる
 送別をされる立場にある企業
 求人難過疎の夕陽の影長し
 年令不問経験性別みな不問
 新聞の頁を増やす求人難
 求人難妻の里へも手を廻し
 求人難元書記長を雇い入れ
 さいはての訛りも聞いて求人難
 罷めそうな奴ばかり来る求人難
 求人難元校長を雇い入れ
 求人難卒業名簿繰りに来る
 テストする会社がされる側となり
 協定を無視求人人に青田刈り
 求人難手近な母をこき使い
 母ちゃんも車掌になつた求人難
 地

スピード

辻白溪子選

手不足を詫びてお客に茶をすすめ
 後任が来るまで専務横に乗り
 天
 家族並と言う手は古い求人難
 急ピッチなどと遅刻は含まれる
 スピードの旅は旅情もなく終り
 スピード時代地球はマイペースで廻り
 スピードを上げ狂人の顔となり
 人力車のスピードだった頃の恋
 スピードの出世それから社内の目
 スピードを横目にバスを待つ欠伸
 スピードを殺してつががない笑顔
 世間さまに答へスピードアップ
 何はさてスピード化へ金を注ぎ
 スピードを落としガイドに喋らる
 スピードで走るコマリーシャル
 スピード違反本署出頭に馴れ
 スピード化和製ジャンボも登場し
 直線になつてスピード増す本命
 スピードを落して妻と子と同車
 退院が街のスピードこわくなり
 手不足を詫びてお客に茶をすすめ
 後任が来るまで専務横に乗り
 天
 家族並と言う手は古い求人難
 急ピッチなどと遅刻は含まれる
 スピードの旅は旅情もなく終り
 スピード時代地球はマイペースで廻り
 スピードを上げ狂人の顔となり
 人力車のスピードだった頃の恋
 スピードの出世それから社内の目
 スピードを横目にバスを待つ欠伸
 スピードを殺してつががない笑顔
 世間さまに答へスピードアップ
 何はさてスピード化へ金を注ぎ
 スピードを落としガイドに喋らる
 スピードで走るコマリーシャル
 スピード違反本署出頭に馴れ
 スピード化和製ジャンボも登場し
 直線になつてスピード増す本命
 スピードを落して妻と子と同車
 退院が街のスピードこわくなり

課題吟

航空士鈍行列車で帰郷する
スピード違反へゆれるマスコット
三日目にまた恋人を変えてきた
スピードで宇宙士だのドッキング
景品のスピードくしが客を寄せ
やっぱり一日一枚日くろのスピード
スピードでかけもつ祝辞の汗をよ
スピードが乗り換えさせた霊柩車
スピード結婚愛情だけの荷物です
スピードの世界に遠く松葉杖
離婚まで超スピードという若さ
スピードを追う日八百長見のが
騒音は云わずスピード化を急ぎ
スピードを出さねば危ない高速路
動く歩道をまだ歩かずスピード時代

佳

スピードを秒できざんで空へ発ち
スピード料理にあれもかけこめれ
司会者がスピード出しても時間切れ
スピードに背を向け盆栽菊作り
フルスピードで来いと上司のいい電話
人
ハイウェイスピード感のない流れ
地
職人氣質スピード仕上げが意にとりず
天
コンピュータスピードアップの世に仕上げ

合理化のスピードはいい邪魔が待ち

逆境

西いわを選

逆境が真の偉人を磨き上げ
気の強い母に逆境支えられ
逆境に至りししみじみ夫婦愛
逆境の時こそ救いの手を伸し
人生に逆境がありおもしろい
逆境に酒の力を借りて耐え
逆境の孝子うれしい表彰日
逆境を乗り越える意志に運がつく
乗り越えてみれば逆境嘘の様
逆境を廻れ右する子がふとり
逆境をものがけばもがくほど落ち目
逆境を気にせぬ妻が居て平和
逆境を乗り越えてする逃避行
逆境の中で疑う目も育ち
逆境のみくじの吉で気が和み
逆境に耐えて育った愛強し
逆境を知ってる朝の靴すべり
逆境を上手に泳ぐ未亡人
落ちるまで落ち逆境の笑い声
逆境の背に希望の子が育ち

代仕男
佳女
芳仙
木魚
古心
緑
正朗
同
芳子
静歩
杜月
古方
静歩
思月
福子
素身郎
木魚
雀踊子
宵明
緑
千翁

初歩教室

— 題「海」 —

本田 恵二 朗

あなたの句材を私の叙法でまとめてみると
いう企画を、昨年一度やったことがある。其
の時、勉強になったという声が沢山舞い込ん
だが、久し振りにそれをやることにする。参
考になれば幸甚である。

海汚染魚も公害になやまれ

和風

句材を説明しただけに終っている。この句材
を如何にして川柳句に仕上げるかに、あなたの
脳味噌を惜しみなく働かせなければならな
い。それは苦しくて、楽しいことである。魚
の中の代表を出すことを考えて見たり、公害
という語を表面に出さぬ描写を考えて見たり
する。つまり練りに練り上げねばならぬ。私
なら、魚の代表を章魚にする。公害を油臭と
する。すると次の句が生れてくる。

(章魚一家油臭へ転居考える)

川柳は唯の説明ではいけないことを銘記せ
よ。

清濁を秘めて大海の波静か
(清濁を呑んで海原知らぬ貌)

翁 童

人一人呑んで所知らぬ今朝の海

露 杖

海見える部屋も馳走と案内され

虎 城

(海のある窓まで添えてもてなされ)

露 声

先頭は海見えたらしいハイキング
ハイキングと表現しなくても、ハイキングらし
いムードを描写すればよい。

(先頭は海を見つけたらしい声)

利 美

これ以上カット許せぬ海水着
(カットもうここまですという海水着)

勝 子

生命のあるごと海も怒るなり
命あるごとと叙さなくても、擬人法を使えば

(海怒る何か不満のある如く)

慶 彦

立法が後手に廻ったシージャック
(立法を後手にさせたシージャック)

春 海

弱虫になるまい海の広いこと
(弱虫になるなと海にさとされる)

千 代

海広く広くいたでを吸うてくれ
(水平線心の傷を吸うてくれ)

孜 孝

海一つ隔てたニュースに株下り
(海一つ越えた政治が株を下げ)

金 三

苦海から泳ぎ疲れた子が帰り
(荒海を泳ぎ疲れた子が戻り)

茂 美

打ち返す波は久遠の謎を秘め
(久遠の謎秘めて語らず波踊る)

愚痴すてに來た古里の碧い海

秋 女

(愚痴捨てに來た里の海碧く澄み)

経済成長の蔭公害に悩む海

一 二 三

(経済の成長公害の海作る)

涙とテープ音一つなく海にとけ

正 直

(テープいま切れて涙の海となる)

召し捕られるものを何のシージャック

頼 次

(実弾がくるとも知らずシージャック)

荒海へ生きねばならぬ船を出し

洋 々

(荒海へ生きねばならぬ船がきしむ)

流れ込む汚濁を呑んだ海の青

流れ込むという説明語を、いさぎよく切捨て

てみると、違った叙法が浮かんでくる。

(海青く汚れを呑んだ貌でなし)

養殖の魚できれいな海に住み

露 芳

(養殖魚きれいな海に住み慣れる)

雲海の旅客のなかにいる孤独

新 之 助

(雲海の旅で孤独にとらえられ)

海辺の雲空想果てしなく続き

保 夫

(空想を果てなく尾引く海の雲)

船と人盗られた瀬戸内波静か

静 観 堂

(シージャックと知るや知らずや瀬戸の風ぎ)

海鳴りに妻は一日磯に立ち

大 吉

(漁夫の妻磯のうなりへ落着けず)

穴道湖の海かと思う波がしら

茂 美

(穴道湖の海と見まがう波頭)

ダボハゼもよし汐風とオゾン吸い 成子

(汐風とオゾンを友に糸を垂れ)

故郷の海がとびこむ汽車の窓 孝華

(車窓からとび込んでくる里の海)

洋行と言った昔は広い海 正夫

(洋行と言われた頃は広い海)

騒然と新聞記事の空と海 富子

(紙面騒然それハイジャックシージャック)

海底の模様テレビに教えられ 綾女

(海底の景色茶の間で観るご時世)

入海が静かに眠る昼さがり 肖二

(入海が昼寝している春霞)

空が無いという都会海もない 凡九郎

(過密あわれ空が無い海が無い)

杓で海かいだすつもりの気の長さ まさひろ

(海の杓でかいだすような日々)

大漁旗なびかせ夕映の浜が湧く 軒太楼

(夕映の浜を湧かせる大漁旗)

山海の珍味を盛った祝い膳 比呂路

(海山の幸に巻かれた喜寿の饗)

五月晴水平線に舟一つ 静子

(舟ボツンと水平線に点を画く)

荒海へ生きねばならぬ船を出し 洋々

(生きねばならぬ荒海を漕ぎ続け)

川柳塔社常任理事会

六月四日午後六時から本社階上で常任理事会が開かれた。

多志・古方氏は健康上で、白柳・文秋氏は奥さんのご病気で欠席。(以上電話連絡)「マージャン会になりそうですナ」と静馬氏という。

「句集刊行記念のこともあるし、栞さんはかならず出席しますよ」と好郎氏。

その言葉どおり主幹以下五人の理事会となった。まず編集部から十一月までのプランを報告する。

七月は路郎忌句会。

八月は西尾栞句集刊行記念句会。

九月は川柳忌句会(物故柳人の慰霊祭)

十月は二賞発表句会と同人総会。

十一月は文化祭川柳大会(本社が当番)

同人一人が一人をふやす運動や、今秋から増刷案など、来年の路郎忌は大々的に「何かをやる」ことも主幹が決意のほどを示めされ「やろうぜ」の意気が高まる。

——八時半閉会。

出席——中島生々庵・川村好郎・傍島静馬・西尾栞・不二田一三夫諸氏。



味の伝統が磨かれた

子司集

幡屋八鶴

本店・大阪東区今橋5・電話(203)7281
東京店・東京都千代田区麹町2・電話(261)3996
売店・各百貨店のれん街

(生き抜こう船荒海にあなどられ)
さて、あなたの詠りと私の詠りとを並べてみたが、かわり来えしたであろうか。それはあなたの解釈の自由であって、私は押しつけることはしない。あくまで参考までということである。自分の表現の方が優れていると思えたらそれでよいのだ。私はあなたの川柳の表現力が一歩でも二歩でも進歩することを希望のみである。皆さんで仲良く頑張ろうではないか。ご健吟あれ。

題「残」七月二十日 締切(九月号発表)

宛先——岡山県倉敷市下津井三五二七一一

本 田 恵 二 朗

大 萬 川 柳

「天使」

入選発表

選 者 清水白柳
投句総数 五百七十八句
入 選 六十二句

東大阪 喜風
汚れてる世相天使のメスを待つ

エンゼルが羽根を休めに来た長屋

高石 好郎
貸付けが天使に見えるうちは無事

天使とも云われて婦長嫁きおくれ

堺 天笑
豆の蔓ここから天使降りてくる

無医村の天使に外気冷たすぎ

堺 草春
高熱へ妻が天使に見える夜

天使の瞳に国境などはない

八尾 鬼遊
翅のない天使漬物石を持つ

我が家の天使小遣いをよく使い

大阪 双楽
悪友も時に天使の役を買い

キユピットさんもう一人居ます適令期

東大阪 綾女
エンゼルが離婚の数に首かしげ

書留へ天使に見える配達夫

富田林 花梢
泣いている妻に天使をふと感じ

たいくつな顔で天使は随ちてくる

堺 素郎
天使かもしれない五十の処女で居る

湯上りの天使秤りの上で寝る

大阪 金三

癒え近し天使が女に見えてきた

倉敷 翁童
商標にされた天使ののが笑い

大阪 新之助
地に墜ちた天使は空を見上げない

倉敷 十四雄
草崩えて天使は蝶を追う疲れ

堺 藤持
土地狭く天使の休む丘もなし

大阪 美房
病院のスト天使では食えません

岐阜 鱗魚
知恵熱の天使それから甘えぐせ

岸和田 きさ子
天使もうかにん袋の緒を切らし

八尾 酔々
豊葦原酔いどれ天使街を行く

倉敷 素身郎
勉強は不得手わが家の天使達

大阪 十止庵
裏街の天使バイブル無用なり

平田 代仕男
病院では天使帰れば気儘な娘

羽曳野 吐来
天使にも鬼にもなつて妻達者

篠山 可住
ここがええと天使は過疎の里へ降

竹原 不朽
エンゼルと二匹敷かれる破目にな

大阪 庸佑
天使いま童話の国に生きており

八代 史朗
シャボン玉非行の眼にも棲む天使

大阪 水客
ソプラノは天使の声に似つかない

鳥根 正朗
我がものになったら天使とは見え

岡山 敬一
天使も人の子白衣で歌う労働歌

高槻 静馬
天使でも食わねばならぬ旗を振り

大阪 生仏
アポロでも天使の住家見つからず

また離婚愛の天使も忙しない

大阪 三十四
夜の天使そろそろくだを巻きは

米子 千代
娘を射抜く天使を父として恐れ

倉敷 里風
母ちゃんが天使だよ僕の熱下がる

天使にも魔女にも女なり切れず

笠岡 要次
薬剤を体臭にして嫁きおくれ

天使にも魔女にも女なり切れず

大阪 阿茶

胎教のつもり天使の額をかけ
花の雲天使うっかり踏みはずし

大阪 章雅

待遇改善白衣の天使ビケを張る
聞えるなら聞きたい天使の美容法

佳句

富田林 花梢

病人を忘れ天使も旗を振る

熊本 芳仙

学会会みんな天使になりたい瞳

八尾 鬼遊

堕ちてから天使に還る空がない

大阪 水客

スモッグの中で天使も笑えない

人ノ句

堺 天笑

ベトナムへ天使は降りるときが無し

地ノ句

大阪 美房

衛星の整理に天使かり出され

天ノ句

大阪 水客

妥協してからエンゼルの薄よこれ

選者吟

トラップもてあそび天使の顔をし

ている

昭和四十五年度

ベストテン(六月現在)

一	水客	一六〇	大阪	十三	利美	九〇	尼崎	二五	きさ子	六五	岸和田
二	天笑	一三五	堺	十四	三林坊	八五	倉敷	二六	幽玄	六五	羽曳野
三	史好	一一〇	大阪	十五	史朗	八〇	倉敷	二七	鬼遊	六五	八尾
四	可住	一〇五	藤井等	十六	里風	七五	倉敷				以下略
五	吸江	一〇五	米子	十七	柳志	七五	大阪				
六	千代	一〇〇	高槻	十八	新之助	七〇	大阪				
七	静馬	一〇〇	高石	十九	芳子	七〇	大阪				
八	好郎	一〇〇	倉敷	二〇	恵二朗	七〇	大阪				
九	素身郎	九五	倉敷	二一	滋雀	七〇	大阪				
十	素郎	九五	堺	二二	ゆきを	七〇	大阪				
十一	扇水	九〇	倉敷	二三	鱈魚	六五	岡山				
				二四	康明	六五	岡山				

昭和四十五年度第八回
「レンズ」 五句以内
締切 七月二十日

第九回
「立場」 五句以内
締切 八月二十日

投句先
大阪府高石市高師浜三丁目五一六
郵便番号 五九二 川村 好郎

雅号ぶつちやげばなし(76)

きよくどう



村上旭童

むらかみ

昭和二十一年一月頃、復員して郷里に帰られて間のない渡辺曉童氏のおすめて当時、活花・茶道をやっていた二十数名、それでは川柳をやってみるかという回という猛烈な会を続けて一年余り、ある日曉童氏に雅号をおねがいしたところ、本名の旭「あきら」に、曉童の童を戴き、旭童と名のついた次第。雅号の威勢のいいのとは別に、細ぼそと近視眼的農民川柳を作って今日に至った次第です。

農業(四十四歳)

季節料理・折詰

大馬

阿倍野区松崎町
TEL 5031・5032
南区豊屋町三ツ寺センター
TEL 9184

10月4日

午後三時から同人総表
午後五時半 二賞発表

柳 界 展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼麻生霞乃先生は近來至極
お元気で、五月十七日、堺
・若茅・河内三川柳会合同
の「霞乃先生を囲む吟行
会」に出られ、摩太郎・満
潮氏の古顔と、新顔半々
にまじって半日を楽しまれ
た。満潮氏の路郎先生の
「旅人」以後の句を暗誦し
た披露には出席者全員が感
銘した。

▼東洋樹賞・路郎賞・三太
郎賞の三賞を受賞された岡
山県の作家三氏(それぞれ
大森風来子・本田恵二郎・
丸山弓削平)を祝福する集
いが開催される。ふるって
ご参加下さい。昭和四十五
年八月二日(日)午後五時
から午後八時まで、岡山駅
前鉄道管理局横の桃花苑

で。会費は八百円程度、詳
細後報。
▼諷詩人(第二十五号)は
諷詩運動十年の反省とし
て、石原青竜刀氏のペンが
光る。
▼ますますと誌上に第三の
雑誌欄が新設され、若い作
家達の要望に応えることと
なった。選者は寺尾俊平
氏。雑誌三句(用紙は自
由)締切り第一回は七月七
日、以後毎月七日厳守のこ
と。誌友・同人・会員以外
の投句も可、但しその場合
は住所・雅名を明記するこ
と。
▼第十三回近県川柳大会
(竹原市)は九月六日(日)
午前八時(受付開始)から
竹原町の三井金属会館で開

催される。兼題は肩・誇・

茶・竹・昔・傘・火・姿・
土、特別課題当日一題出
題、会費三百円。(昼食・
参加費・発表誌を含む)
▼岩見沢川柳社七周年・柳
の芽川柳会五周年記念川柳
大会は七月十二日正午から
岩見沢市緑ヶ丘ホテル東山
で開催。

▼南大阪川柳会・玉造川柳
会合同吟行は六月二十一日
(日)日前宮、竈山神社、
伊太祈曽神社巡行で行なわ
れた。

▼どんぐり川柳会・あすな
ろう川柳会・丸紅川柳会合
同吟行は六月二十一日午後
一時あやめ池魚国クラブで
開催。

▼ながさき誌百二十四号は
西日本川柳大会号として、
昭和四十五年五月十日発
行。

▼川柳津がろ誌四月号は
「おかしき川柳社二十
周年記念大会特集」として
四月三十日津可呂川柳社か

ら発行された。

▼川柳うずまき五月号は
「紋太さん追悼号」として
五月五日発行。

▼川柳人誌四百五十八号は
井上信子句抄号として四月
二十日発行。剣花坊生誕滿
百年の自祝事業の一環に信
子夫人の五十一句を掲載。
男ならかういふ時に酔ふ
だろう

握り合ふ指をほどけば風
ばかり
一人去り二人去り仏と二
人

▼井上剣花坊、井上信子夫
妻文学碑が、夫妻の出生地
に近い萩市市民館の傍に建
立される。

飛びついて手を握りたい
人ばかり
剣花坊
国境を知らぬ草の実こぼ
れ合ひ

信子
右の両句が彫られ完成は
剣花坊師の祥月命日の九月
十一日か文化の日になる予
定、一口五百円の寄附が募
集されているので賛同の向

できたての生ビール
アサヒビール 本生
レーベルの日付けは新鮮なうまさのしるしです

きは、山口県萩市江向、萩
市教育委員会社会教育課の
文学碑建立事務局宛送金さ
れたい。
▼あすなる誌八十一号は
「類想句追放運動特集」と
して五月一日発行された。
革新派川柳誌からも類句の
追放運動を積極的に推進し
全国に展開するよう呼びか

けられている。

▼直原玉青画伯指導の第九回青玲社余技日本画展は同画伯印度旅行展と併せ、六月九日から十四日まで大阪梅田阪急百貨店七階催場で開催された。中島生々庵主幹は「辦」「境内」「二点を、小石夫人は「白い花」「山の辺の道」の二点、河村瑞川氏、岸本豊平次氏もそれぞれ力作を出品、好評を得られた。

▼北川春巢氏(枚方同人)は五月十四日から二十二日までの九日間「病院長研修」で東京へ出張、毎日の通勤の一時間にかなり疲れますとのお便りがあった。

▼石曾根民郎氏(松本市)から「緑雨さんが亡くなり感慨無量です。私が川柳雑誌を知った当時いろいろご交誼を得ました。晩年には大阪の句会に参りましたときお宿をして戴きました。奥さんは信州の伊那のお方とお聞きしたことを覚えて

います」

▼大島清明氏(熊本市)は二月十六日から熊本大学附属病院に入院、内臓のあらゆる検査をされたが、これと云う異状はなく老齡のための血行障害によるものと診断され、専心治療を続けておられる。五月中旬からは大分快方に向った心地であるとの由、一日も早いご快癒をお祈りします。

▼村上春巳氏(姫路市同人)は六月一日長良川の鵜飼を見物、海の国から来て、山と河の景色をぞんぶんに楽しまれた。「かがり火も消えて長良の深い夜」

▼岡田某人氏(大阪市)は評論新聞の編集局長として活躍されていたが、吹田市千里の市立弘済院老人センターに入院加療中とのこと速かなご快癒をお祈り申し上げます。

▼鈴木可香氏(名古屋市)は五月十八日伊豆半島の旅を楽しまれ、堂ヶ島から句

信を寄せられた。「波あってよし無くてよし堂ヶ島」



▼羽原静歩氏(守口市同人)から「一三夫氏が月一回ラジオ大阪へ本社句会の入選句を紹介されているが、川柳普及によろこばしいと。」

▼石倉旅風氏(大和郡山市同人)の新住所は、奈良県大和郡山市小林町四一四の一三。

▼川柳「ながや」句集第十四集が昭和四十五年五月一日東京都中央区越前堀二の八、萩野方東都川柳長屋連から発行された。編集後記を書いて一人松井清志氏は「この句集の中に、良い意味での江戸っ子気質を

感じてもらえたら幸です。変転しつつある言葉の歴史の中で、頑固なまでに、古語の美しさを保存し、明治

・大正・昭和を生き抜いた庶民精神を一句に托し、飾らざる江戸訛のつぶやきを記録して行く姿に長屋連の栄光を発見したいものだ」と云っている。毎月の句会の句の集成と、長屋住人の肩の凝らぬ随筆はたのしめる。石戸弥平画伯の似顔画が風趣を添えている。定価三百円、送料五十円。

▼六月八日の故橋本緑雨追悼句会に節子未亡人と令息修甫氏が出席、生々庵主幹の紹介で挨拶をされた。

▼西尾菜氏(八尾同人)は六月七・八日は下呂温泉。九・十日は能登の和倉温泉。十一・十二日は伊豆稲取温泉、十三・十四日は湯の郷温泉へ。

▼山田季賛氏(高槻同人)は和歌山箕島・白浜へ同僚との旅をたのしめました。

▼川岡靈眼子氏(課早市)

はこのほど中風でたおれ、川柳活動も中止されているが、ご全快の日をお待ち申しあげる。

▼直原七面山氏(岡山同人) 六月中には退院の予定といううれしいおたより。全快したら早い機会に本社句会に出席したいと。

▼不二田一三夫氏は六月十三日空路高知へ、秋田実先生以下漫才作家くらぶの筆友と旅をされた。雨の室戸に詩情わけせ十五日帰阪。

健康!
アリナミンA

☆効能 疲労・神経痛

33

川柳は

己を磨くもの

藤井春日

古くとも僕には仁義礼智信
故路郎先生の句である。

人間陶冶の詩と云われる川柳によって己を磨くことは、あらゆる面において複雑化した現代生活に最も当を得た品位ある趣味であり、その中から自分自身が磨かれてゆくことであろう。

さてこのたび竹内翁童君を同人に推薦してはどうかと野田素身郎氏に話を持ちかけたところよからうと云うことで、素身郎、春日推薦で理事諸先生にご相談申しあげ快くお許しを得、六月号に新人として同人の発表がありました。

彼は大へんな勉強家で、かつては短歌で活躍されたこともあり、社の出張でもあらうなればいたるさきさきで古本屋をあさっては貴重なものを手に入れ、最近のベストセラーものは殆んど集め古本屋は何時でも開業出来る位で、それが私の会社にクラブ活動として文

芸部の発足を見るに至り川柳に興味を持ちはじめた彼氏、はじめは単に五・七・五の文字を並べるに過ぎぬ川柳ならぬ川柳を作句しては私に添削を求めるので私も川柳の何たるかを説き添削も私なりにして、多作多読をすすめたところ一日五十句あまりを作っていました、川柳塔を購読してから一年半になった今日では地方新聞にも投句し再三入選、佳作入選もされるようになり僅か四年余りの間に非常な上達ぶりを見せ此頃では、私が受け太刀の状態であります。ところが六月号の川柳塔の届いた日、六月一日付消印の無記名のハガキが翁童君の許に投げ込まれ、その内容たるやこの度同人になられおめでとうございませう。近作柳樽には百余名の投句者があるが僅か二句ばかりの入選句で同人になれるならば百人に八十人は同人になれる筈、もっと実力のある人が同人になって欲しいと云う意味のいやがらせが記されていました。

何処の何方かわかりませんが川柳塔を愛読されている方は斯道の同志であり一度の面識はなくともその作品により百年の知己、であり親しさが湧いて来るものであります。それにもかかわらず実に嘆かわしいハガキを差出すなどもってのほか、それほどの川柳熱のある御人ならば堂々と名乗りをあげ本人に意を告げるか川柳塔誌上に意見の投稿を寄せるだけを柳人諸氏に伝えるのが道ではないでし

ようか。このことは推薦者に録を向けひいては川柳塔理事諸先生に一矢を放ち川柳塔社を冒瀆する行為にはかならないと私考いたしました。どうかそう云う考方見方は捨てて貴方のため義と信をもって斯道に精進されることを希み一日も早くよき指導を得て同人になられますことを祈っております。翁童君は大人げない者もいるものと実に淡々として今日も出張に出かけました。また旅先のことなど句にして土産にすること楽しんでいきます。

小川静観堂著

句集「はいまあと」 (非売品)

序文―湯川銀界。自序に昭和十三年北支那視察の路郎先生との出会いなど―処女作「いつそちぎろうかシヤツのぶらぶら」ほか。

発行所 伊丹市春日丘四の五三六六四

小川 昌 男

―句会 往 来―

▼玉造川柳会―七月十日(金)午後六時―
題・みじめ・往復・「宿題」底(玉造交差点南百米大阪信用金庫)

▼南海川柳会―七月十六日(木)午後六時

―題・高速・軽はずみ・監査(ナンバ高架下・親和クラブ)

▼大阪川柳会―七月二十日(月)午後六時
―題・魔・寝不足・楽天家・横這い(松崎町以二丁目和貴荘)

旅馴れた幹事が車中でうまく寝る 葛城
名幹事ちゃんと穴場も調べてた 一三夫
酒持って来いと幹事の気も知らず 文秋
先究の幹事に海が暮れてくる 水客
仲居またそと耳打ちする幹事 紫香

席題「訛り」

岡橋宣介選

丸出しのなまりで逢った久しぶり 滋雀
タレントの人氣訛りも芸のうち 頂留子
歌まつり訛りも入れて席がわき 茂美
三度目はお国訛りで言うて呉れ 葛城
国訛り漸くぬけて職を変え 柳志
大物になって気にせぬ国訛り 圭井堂
看護婦が氣性の強い国なまり 金三
集金人お国訛りと話しこみ 鬼遊
うれしさをかくし切れない国訛り 天笑
交渉のヤマ場にちよいちよい出も訛り 勝晴
怒ってとあとでわかった国訛り 新之助
国訛り隠さず出世する男 与呂志
国訛りまさか欺すと思うてず 文秋
働き手と言われ訛りがまだとれず 紫香
陳情の旗と訛りが来た宿舎 一二三
「また来てな」来る氣にさる国訛り 醉々
国なまりに受話器持ち変える 美代
質問は野党の強い東北弁 一三夫
奥さんが訛りで怒鳴る一大事 朝二
身につかね訛りが椿油売 朝二
テレビドラマに田舎訛りがきれい 形水
訛り持つ男がつけていた喪章 夢成
敗北の夜を埋める国なまり 冬二
白旗はもたぬ訛りのきつい父 冬二

兼題「鼻」

阿部柳太選

やあおうと堅い握手のその訛り 宣介

学歴を鼻にかけないから好かれ 扇水
末席の意見は鼻であしらわれ 扇水
獅子鼻へ良い相ですと言う易者 晃
整形の鼻でマダムはまた稼ぎ 芳子
反対に鼻を折られて戻って来 李朋
鼻眼鏡姑の顔を恐くする 正朗
隆鼻術してから怖い顔になり 葛城
企らんだ笑いとわかる鼻の皺 生々庵
交渉は弾力のある鼻で押し 冬歩
度々の無心も鼻であしらわれ 双楽
鼻の艶パロメーターになるベツト 綾女
昼間から父の鼻赤きを憎み 風
独りみるドラマに鼻をつまらせる 新之助
ライバルの鼻唄素直には聞けず 虎声
パン食いに自慢の鼻が邪魔になり 大吉
白痴美の鼻が可愛いあどけなさ 一三夫
鼻ツ柱の強い女房におんぶされ 瓢太
空むいた鼻が個性と言う美人 形代
禁煙でつい鼻いらうクセがつき 風水
日焼せし鼻々ハワイより帰る 冬歩
新婚のあなたあなたが鼻につく 花梢
朝起きて見れば女の低い鼻 圭井堂
断末の鼻先沈むねずみかご 美代
デモの朝出鼻くじいて中止が出 双楽
明鏡止水鼻毛ゆつてのむ抜いて 静歩
馬の鼻撫でてたのむと坂の道 トメ子
鼻の差で破れた馬券踏みじり どんたく
鼻筋を塗って塗って高く見せ 誓二

兼題「善意」

金井文秋選

かずら下鼻へも一刷毛塗る女形 金三
鼻剥けたまま金色に付ちたまい 滋雀
鼻缺けた地蔵の顔へ話しかけ 綾女
疑いもなくパパの子丸い鼻 一三夫
鼻かんで子どもを客の前に出し 紫香
パパに似た鼻ママは氣に入らず 醉々
鼻声に負けて保険へ判を押し 柳志
仕送りがへり出し旦那鼻につき 一二三
むなししい抵抗又鼻声にまけた夜 六電子
鼻ととのえて造花の価値にしまい 柳城
加工した鼻とは知らず賞めちぎり 葛城
鼻一杯呼吸する力士へマイク向け 柳城
鼻ぐらいどうでもよいと惚れており 紫香
あけつばなしにして善人の団子鼻 一三夫
後悔の涙は鼻の先きで落ち 柳太
鼻の汗ふいてテレコな嘘を言い

十円の善意急場の赤デンワ 花梢
判り易い道まで送って来た善意 紫香
うるさいと女は思っている善意 好郎
反省の主わからぬままにつく金 綾女
反意の中で善意を噛みしめる 李朋
追伸と書いて善意をあふれさせ 水客
ささやかな善意に恋のエピローグ 醉々
酷評の裏の善意が汲み取れず 形水
新聞のさかになされていた善意 夢成
山の子の善意果箱に育つ雛 朝二
捨犬に善意を見せて噛みつかれ 生々庵
座席つと譲りそこらにもう居らず 静馬
友情の善意へ無心口にせず 弥生

空しきは善意を金で割り切られ
住む社会 違つて善意うたぐられ
善意から 介抱して 手を握り
アルミ貨が善意の箱で 生き返り
ゆきずりの 善意忘れぬ人となり
憎くまれぬ お隣 善意にとられ
誤解され 善意も 気をつかい
傍聴席 善意の人が 眼を拭う
立つてやつたおの おちちゃん座を
クイズにも 善意「歩みの箱」が待つ
世におく 人の 善意の 底に生き
善意とも 聞ける 詐欺師の 口に乗る
見せかけの 善意と知らぬ 素直な娘
ライバルへ 善意の 拍手する 素直
定期券だけが 戻ってきた 善意
小さくとも 紙面に 光っている 善意
乗っ取りまでも 善意の 解釈す
千羽鶴の 一羽一羽がもつ 善意
善意から かけた 電話で 嘘がばれ
物好きの ようにとられて いる 善意
食う足しにならず 善意に 背を向ける
善意かは 知らぬが 世話を やき過ぎる

兼題「メニユー」

傍島静馬選

おごりだとかわりメニユー派手に
何時からかもう 割勘でないメニユー
メニユーにはないたこ焼に子はむね
割かんのメニユーへ 首をよせ
メニユーを見るより 見本見ではいり
注文をしてからメニユー 読み直し
懐ろでメニユーを決める 子沢山

美代 柳太 鬼遊 花梢 トメ子 天笑 勝晴 肖井堂 葛城 大 弥生 与呂志 冬二 形水 頂留子 柳太 花梢 水客 文秋

メニユーだけ立派で料理のまじい
懐ろと相談しつつメニユーみる
おごり気メニユーあてがいお手洗い
メニユーには時価としてありや
腹よりも 具合いで 選るメニユー
夫婦ものメニユーは 安いものを 撰り
値上げ値上げメニユー印刷してお
そば一つ 取るのにメニユー裏表
最後までメニユーを読まこヒー
二次会メニユーに 用はないつま
銘々がメニユー通りの 金を出し
初デートメニユーは 高いものをより
サンプルで 迷いメニユーで 又迷い
パトロン 好みの 合わぬメニユー
メニユー手で 押さえて 通ぶつてみる
メニユーには ないものばかり 注文し
女づれメニユー一巡ひまが 要り
マスターが かわりメニユーの 値も
常連にボーイはメニユー 持つて来ず
メニユーには 中毒すると 書いてなし
献立表 見ているうちに 気が変わり
中華料理 当用漢字に ないメニユー
現物が 来てからメニユー 読み直し
カレーライスと ないメニユー 持っている

兼題「失言」

若本多久志選

失言を 悔いる 夜道の ひとり ぼち
失言へ もう ぎりぎり 腹の 虫
失言をしてから 仇名つけられる
失言を取り 消すまでの 妻の 愚痴
堂々の 失言 秘書は いそがしく

圭井堂 肖二 千万子 八郎 好郎 摩太郎 儀一 滋雀 文秋 一三夫 好郎 摩太郎 水客 勝晴 宣介 柳太 圭井堂 勝晴 柳太 一三夫 静馬

失言を 記者は 手帳に しまつとく
失言へ 静かに 辞表 書いて いる
酔うて いる など 失言へ 逆わず
ハンカチを出し 失言の メガネ 拭く
婚約当時の 言葉 を 女房 まだなじり
失言は 椿の 落ちた 赤に 以て
ご破算にした 失言が 寝つくれず
失言も 平気 で 通る 席 ぬくし
計画 通りと 言う 失言もある 議会
失言で 名宰相の 名が 残り
失言があつて スピーチ 肩 ほどれ
失言へ 聞き捨て ならぬ 野次が とび
失言を 取消す 意志 も ない 二人
女性 が 一人 まじつて いた 失言
言いそこ ない 聞き ないで 笑わ せる
失言も 笑うて すませる イスで 良し
人間 味 ない 失言で 見は なされ
失言に また 年甲斐 を 笑 われる
生酔い で つい へそ くりの 在 が 知れ
社長 失言 秘書の 頼 頼に 助けられ
失言を とがめる 相手 が まじめすぎ
失言の 急場へ おどけた 演技 見せ
失言の とこだけ メモを とつて くる
失言の 箇所も チェック 速記 録
つい 口が すべり 本心 さらけ 出し
失言を 詫 びて 帰れば 星 が 澄む
失言も 良人 に 言え ば 泣いた 宵
エネルギーの 余つた 分を 失言す
後妻とも 知らず かつ 歳を 聞き
何げ ない 問いに ひと言 洩らし かけ
失言へ テープは 容赦 なく 回る
失言も とがめ ぬ 席は タダの 酒

勝晴 静歩 好郎 夢成 一二三 水客 万梢 与呂志 万の 醉々 酔々 冬歩 正朗 新之助 美代 一舟 摩太郎 静々 八郎 茂治 天一 誓二 滋雀 肖二 天三 圭井堂 朝二 多志

(写真・葭乃先生(左)と摩天郎氏

どんぐり川柳会（大阪市）

目飾りしても 冴えない 日々づく

幸子

川柳たましま

水粉千翁報

備前川柳社

日賀芳月報

去年より又太ってる衣更え

川柳ウイロー社（ハワイ）

秘書からのメモの通りにとほけられ
祈るよな目付きでとほけ待っている
白柳

富柳会句会(富田林市)

阿部柳太郎

離農して浮世の浪にのりきれず
燃え上る恋は理性をもえつくし

よるめきへじやまな理性が顔を出し
知性と理性淋しい女にしてみたい

彼女理性こんな燃えも知らず
三軒目までは理性があつた酒

相談をするに理性がゆるさない
悪魔の理性ひらめかし

女です日頃の理性何所へやら
駅前のピラに理性をくすぐられ

一七日・二七日と理性とりもどす
理性より愛情の娘が先に嫁き

もう一と花咲かすじやまな理性持つ
灰皿へ突込む理性失わず

白柳

池田古心報

断った後にわびしさだけ残り

夕焼けが入居の人の顔に映え

沖繩の素顔二年後を信じ

せつせつと何訴えるすきま風

怒ってはいない顔面神経痛の顔

神経にさわり返ったドアの音

散る花の命実となり種となる

鐘の音を偲ぶ城下の屋敷町

旧友と昔を偲ぶ花の下

声明に磐石の意志ひそめられ

色紙に偲ぶ恩師の筆の跡

水仙の花は此の地も春ならん

亡き父を偲ぶ念仏ねんがいら

たつよ

遠吠えに似た声明で茶をにこし

和歌山短詩型文学クラブ

中筋三幸報

蛙浪

土壇場になつて良心泣きくずれ

良心の格差が違つ議員章

良心を野暮な人だと言ふ女将

鯉鱗の反抗主婦の手に余る
満ち足りて風のまにまに歩きたい
脱ぎすてる下着ついでに汗もふき
これがまあ下着かと祖母目を見はり
日本人の旅ステテコになりました
下着正してやめエッチと目ではたがり
待つ言葉風さえぎれど目でわたり
矢車もならず坊やも昼寝です
良心も悪魔に変わる危機の前
良心の人の背丸るい路地の奥
なりゆきの良心仰山誉められて
矢車も無愛想なり無風帯
春風について誘われてした浮気
下着には親しみ深き心持ち
川柳まばたき
出原敬一報
孫の手が静かに迫り目をかくす
嫁ぐ日が迫り追われる母の指
暮れ迫り良き年の松生ける妻
年新たな心の恋を入れかえる
盆栽の松不きげんのまきに伸び
幸のこぼれる鈴を深く刺る
矢車の家をおしえるボールの児
ひな人形閉じぬ瞳が又悲し
妥協せぬ息子に祖父の血が流れ
豆まいて心の鬼を払いいたい
町長の選挙が夫婦の仲を割り

選挙権出来たと知らず下宿先
地方選義理人情がじゃまになる

当選の票差が酒の味になる

飯面かも知れぬ笑顔へ投票し

一票を五人へいれる口上手

愛すればこそその人をわざとさけ

踏まれても愛一筋に生きた母

さめた湯がわいてあふれるほどの愛

愛朽ちて紙屑のごと捨てられる

さりげない愛が心に瀬む夜

初雛は里親ちよつと荷が重む

うたた寝の手もマンガを借りて読み

妥協して生きる空虚がはなれない

税金はこわいが相続してみたい

万山は花曇りして千鳥足

目がまわり今日のドラマの幕が開く

上水道出来る日を待つ水くみ番

女ごころ足袋の白さを失わず

催促のない仏壇の花が枯れ

草初

加美

黄銅六角ボールトナット

及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 345214

夜間 4408

会句忌郎路

日時 七月七日(火) 午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275 番

柳話 中島生々庵
「柳」 清戸古方
「本筋」 川村白柳
「ロマンス」 北川好郎
「恩師」 川春果
席題 三題(題と選者は当日発表) 各題三句
会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鯉谷仲之町20

川柳塔社

8月の兼題 「水笛」 「鶏柴」

同人総会は10月4日午後3時
二賞発表会会は同日午後5時半
会場 以和貴荘
(ご宿泊の方はお申送ください)

九月号発表(7月15日締切)

川柳塔(10句) 中島生々庵 選

―自選は四句以内―

近作柳構(10句) 北川春果 選

九輪抄(3句) 清水白柳 選

課題吟(各題5句以内)

「ヌード」 不二田一三夫 選

「鈴」 林野甦光 選

「主役」 国弘半休門 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十月号発表(8月15日締切)

川柳塔(10句) 中島生々庵 選

―自選は四句以内―

近作柳構(10句) 北川春果 選

九輪抄(3句) 清水白柳 選

課題吟(各題5句以内)

「古米」 小幡里風 選

「やせ我慢」 若林草右 選

「周遊券」 吉田水車 選

★川柳塔の投句は本社同人に限りません。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

後藤梅志著

「秀句鑑賞と梅志句集」

送料共 五五〇円

中島生々庵著

「川柳講座」

送料共 五〇円

高鷲亜鈍著

「白黒記」

送料共 七〇〇円

若本多久志著

「親こころ・子心」

実費二〇〇円 送料六五円

若本多久志著

「老いの坂」

実費四五〇円 送料七〇円

橘高薫風著

「れもん」

送料共 五〇〇円

・ペンペン草・

★「旅人」以後の路郎先生の遺句を毎号2ページぐらいつつ発表することにしたが、これには白柳さんが当ってくださる。

★原稿が3カ月分ほど編集室で待機している。執筆諸氏には申しわけないことがある。

★最近愚妻が知りあったK

夫人は、故水府先生のご次男へ嫁いでおられる方の母堂である。愚妻はボクのやっている仕事を誰にも話さない主義だが、こと水府先生のお名前が出たので、それから川柳の話がときどきははずむそう。故水府先生の奥様は、ボクの名前を覚えていてくださったとか。★孫のはなしになって——
故水府先生が、新聞柳壇の選をされていた当時、ひと握りの応募ハガキを片手に、一枚、一枚「ボツ」、
「没」と、口に出されていたのを、そばで見えていた三、四歳の令孫が、ハガキを持てば、「ボツ」、「ボツ」と云いながら一枚ずつ右向きへ置かれるそうである。愉快な話である。——幼児の観察力というものはするどい。

★最近の句評

に「よく

EASY CARE / 手のかからないせんい
東レデイトロン
レインコート

東レ株式会社



く見て「いるね」と、いうことをあまり聞かなくなったが、故路郎先生や葦乃先生は、よくこの「よく見ているね」を連発されたものだ。幼児の観察力に負けないようにしたい。
★句会のピンチヒッターには、白柳さんがちよいちよい出場されるが、ボクはこんどまた都合で「一路集」の代選することになった。ちよっとおことわりしておく。

何を選んでいたぐくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのにも心にくい贈物かと存じます

一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

高島屋

なんば本橋
・日四
・大東
・東京

定価 百八十円 (送料六円)
半年分 千 百 円 (送料六円)
一年分 二千百六十円 (送料六円)
昭和四十五年六月二十五日印刷
昭和四十五年七月一日発行

大阪市南区船中仲之町二〇番地
編集兼 中島 隆太郎
発行人 中島 隆太郎
印刷所 大陽印刷株式会社
郵便番号 五四二

大阪市南区船中仲之町二〇番地
発行所 **川柳塔社**
電話 大阪・二七一―三九八五番
振替口座 大阪・三三三八八番

(不二田一三夫)

黒潮躍る 紀州路へ



＜白浜ゆき＞ なんば発時刻

急行 きのくに6号…(毎日)…12時51分発

急行 きのくに11号…(毎日)…16時40分発

急行 きのくに7号…(土曜)…13時21分発

＜白浜・新宮ゆき＞ なんば発時刻

急行 きのくに2号…(毎日)…7時45分発

夜行直通列車…(毎日)…22時15分発

●きのくに6号ときのくに7号は座席指定席券を 他の列車は座席整理券を発売

お問い合わせ・南海交通社
(641) 8686 (341) 5038

南海電車

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬萊 焼売

大阪なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー